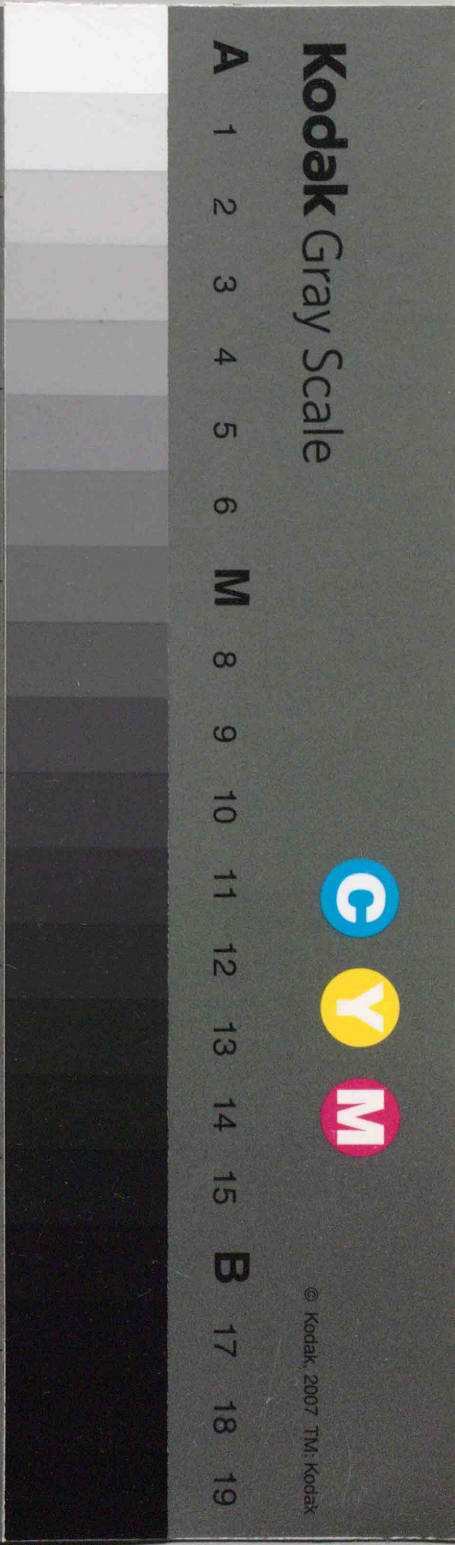
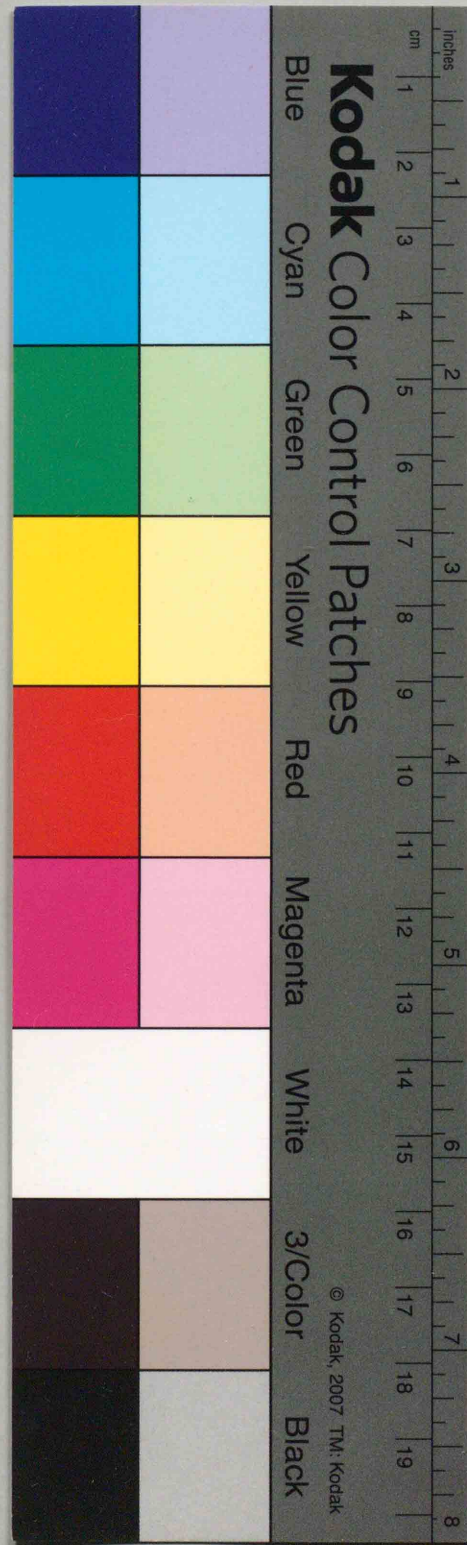


初等科國語

文部省

六

3759
Mo14
資料室



41386

教科書文庫

4
8/0
31-1943
2000.0 35905

200030
2766

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

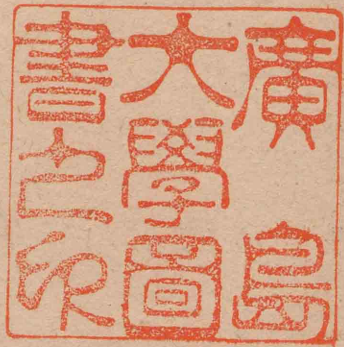
© Kodak, 2007 TM Kodak



資料室

395.7
M04p

初等科國語



六

文部省

目録

一	明治神宮	四
二	水兵の母	九
三	姿なき入城	十五
四	稻むらの火	二十
五	朝鮮のあなか	二十六
六	月の世界	三十四
七	柿の色	四十三
八	初冬二題	四十八
九	十二月八日	五十二
十	不沈艦の最期	五十八

十一	世界一の織機	七十三
十二	水師營	八十二
十三	元日や	九十八
十四	源氏と平家	九十九
十五	漢字の音と訓	百十四
十六	塗り物の話	百十八
十七	ばらの芽	百二十六
十八	敵前上陸	百二十八
十九	病院船	百三十四
二十	ひとさしの舞	百四十二

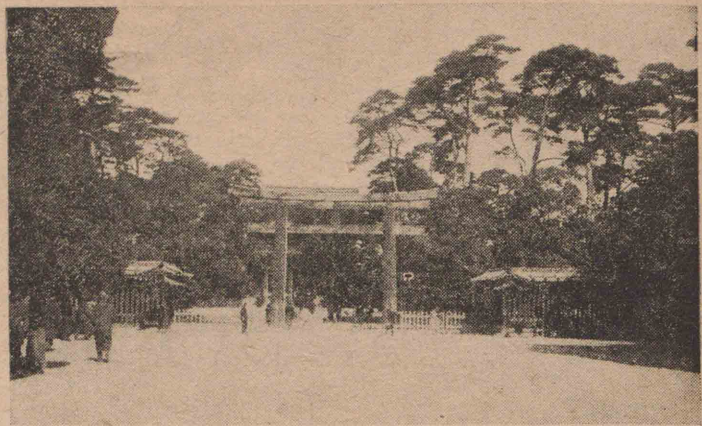
附録

一	土とともに
二	愛路少年隊
三	胡同風景

一 明治神宮

參拜

神宮橋を渡りて、まづ仰ぐ大鳥居に、菊花の御紋章を拜するかしこさ。南參道に入れば、夜來の雨に清められし玉砂利、さくさくと鳴りて、參拜の人々、あたかもいひ合はせたるごとく、足並みのおのづからそろふも尊く思はる。御造營當時、國民の真心もてたてまつりたる木々は、參道の左右を始め、到るところすき間もなき木立となりて、神域いよいよ厳かならんとす。



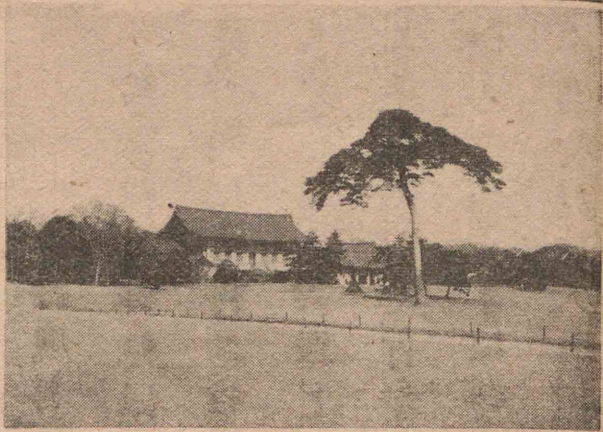
左折して更に大鳥居を過ぎ、神氣身にせまるをおぼえつつ、静かに歩みを移せば、參道はまた右折す。この時、正面やや遠く拜する南神門のけだかさ、美しき玉垣に連なる鳥居の奥に、すがすがしき赤松の木立を負ひたる樓門は、一幅の繪畫に似て、しかも尊嚴のおもむきをそへたり。

水屋の水に口すすぎて、この門に入れば、中央の拜殿、左右の廻廊、庭上の白砂、すべて清らかに、厳かなり。

拜殿に進み、明治天皇、昭憲皇太后御二柱の神の御前に、うやうやしくぬかつく。

つつしみて、御在世中の大御歌・御歌をしのびまつれば、どこしへに民やすかれといのるなるわがよをまもれ伊勢のおほかみ

神風の伊勢の内外の宮柱ゆるぎなき世をなほ祈るかなと、神かけて祈らせたまへるを、今どこしへに神靈としづまりまして、御みづから世を守り、國をしづめ、民草をもみそなはすらん。大御心のかたじけなき、そぞろに涙のわき出づるをおぼゆ。



寶物殿

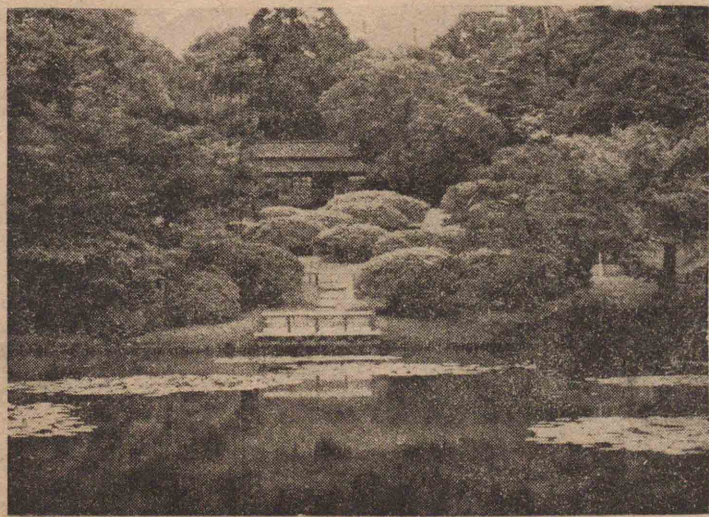
西神門を出でて行く道は、しばし森林の奥に人をいざなふ。やがて木立遠ざかりて、みどりの芝生、遠く廣く續き、道いとほるかなるかなたに、寶物殿を望む。

殿内に入りて、御遺物を拜観す。日常の御生活のいかに御儉素にわたらせられしか。御机は紫檀にも黒檀にもあらずして、ただ黒きぬり机なり。竹の御硯箱は何のかざりもなく、筆鉛筆等、國民學校生徒の用ふる物と異なるところなし。昭憲皇太后の

御硯箱は、ふたの裏に石盤せきばんをはめ、石筆はちびてわづかに寸餘を残すのみ。まことにおそれ多き極みといふべし。

舊御殿舊御苑きよゝん

舊御殿舊御苑は、もと南豊島御料地の内にて、御二柱の神に御由緒深きところ。御殿とは申せど、質素なる平屋にして、行幸ありし時の玉座今もそのままに拜せらる。

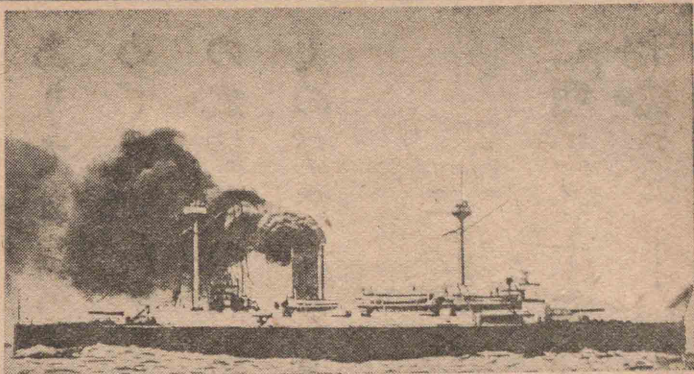


舊御苑に入れば、木立深く、道めぐり、池の眺め廣きところ

に、御茶屋ありて隔雲亭かくうんていといふ。ほのかに承れば、この御苑は、明治天皇御みづから、森の下道下草まで何くれと御仰せありて、自然のままに作らせたまひ、昭憲皇太后かぎりなくめでさせたまひて、しばしば行啓あらせられたりとぞ。昔の武藏野むさしのの面影、そのまま今に残りて、どこしへに大御心をしのびまつるも、いとかしこしや。

二 水兵の母

明治二十七八年戦役の時であつた。ある日、わが軍艦高千穂たかほの一水兵が、手紙を讀みながら泣いてゐた。ふと、通り



あだが、

かかつたある大尉がこれを見て、餘りにめめしいふるまひと思つて、
 「ごら、どうした。命が惜しくなつたか。妻子がこひしくなつたか。軍人となつて、軍に出たのを男子の面目とも思はず、そのありさまは何事だ。兵士の恥は艦の恥、艦の恥は帝國の恥だぞ。」
 と、ことばするどくしかつた。

水兵は驚いて立ちあがりしばらく大尉の顔を見つめて

「それは餘りなおことばです。

私には、妻も子もありません。

私も、日本男子です。何で命を

惜しませう。どうぞ、これを

ごらんください。」

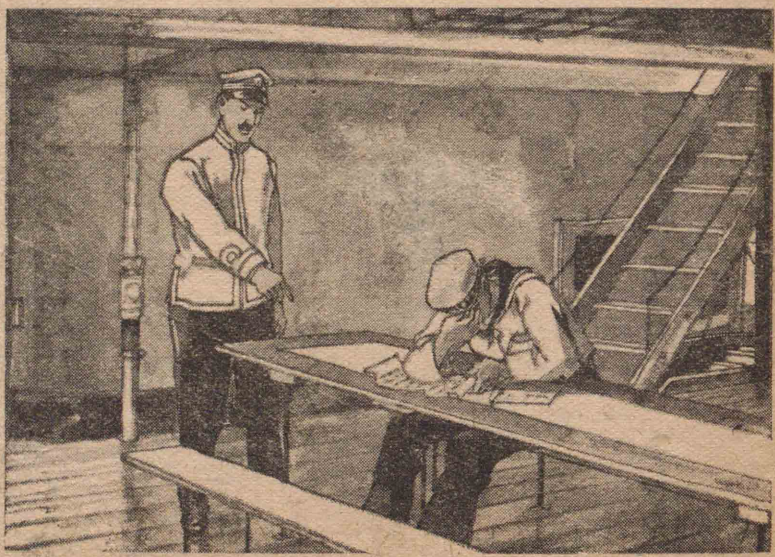
といつて、その手紙をさし出した。

大尉がそれを取つて見ると、次

のやうなことが書いてあつた。

聞けば、そなたは豊島沖の海戦

にも出でず、八月十日の威海衛攻撃とやらにも、かくべつ



の働きなかりし由、母はいかにも残念に思ひ候。何のためには候はずや。村の方々は朝に夕に、いろいろとやさしくお世話なしくたされ、一人の子が御國のため軍に出でしことなれば、定めて不自由なることもあらん。何にても忍んりよなくいへと、しんせつに仰せくだされ候。母は、その方々の顔を見るごとに、そなたのふがひなきことが思ひ出されて、この胸は張りさくるばかりにて候。八幡様はちまんに日參致し候も、そなたがあつばれなるてがらを立て候やうとの心願に候。母も人間なれば、わが子にく

しとはつゆ思ひ申さず。いかばかりの思ひにて、この手紙をしたためしか、よくよくお察しくたされたく候。

大尉は、これを読んで思はず涙を落し、水兵の手をにぎつて、「わたしが悪かつた。おかあさんの心は、感心のほかはない。おまへの残念がるのも、もつともだ。しかし、今の戦争は昔と違つて、一人で進んで功を立てるやうなことはできない。將校も兵士も、皆一つになつて働かなければならない。すべて上官の命令を守つて、自分の職務に精を出すのが第一だ。おかあさんは、一命を捨てて君恩に報いよといつておられるが、まだその折に出あはないの

だ。豊島沖の海戦に出なかつたことは、艦中一同残念に思つてゐる。しかし、これも仕方がない。そのうちには、なばなしい戦争もあるだらう。その時には、おたがひにめざましい働きをして、わが高千穂艦の名をあげよう。このわけをよくおかあさんにいつてあげて、安心なさるやうにするがよい。

といひ聞かせた。

水兵は、頭をさげて聞いてゐたが、やがて手をあげて敬禮しにつこりと笑つて立ち去つた。

三 姿なき入城

いとし子よ、

ラングーンは落ちたり。

いざ、汝も

勇ましく入城せよ、

姿なく、

聲なき汝なれども。

昭和十六年十二月

ラングーン第一回の爆撃に、
汝は別動隊編隊機長として、
近郊ミンガラドン飛行場にせまり、
敵スピットファイヤー二十數機と、
空中戦はなばなく、
陸驚はその十六機をほふれり。
更にラングーンの上空に現れ、
巨弾を投じたる一瞬
敵高射砲弾は、
汝が愛機の胴體を貫ぬきつ。

機はたちまちほのほを吐き、
翼は空中分解を始めぬ。
汝につこりとして天蓋を押し開き、
二王立ちとなつて僚機に別れを告げ、
「天皇陛下萬歳」を奉唱
若き血潮に、
大空の積亂雲をいろどりぬ。
それより七十六日、

汝は母の心に生きて、
今日の入城を待てり。
今し母は齋壇さいだんをしつらへ、
日の丸の小旗二もどをかかげつ。
一もどは、すでになき汝の部隊長機へ、
一もどは、汝の愛機へ。
いざ、親鷲を先頭に、
續け、若鷲。
ラングーンに花と散りにし汝に、
見せばやと思ふ今日の御旗ぞ。

いとし子よ、
汝ますらをなれば、
大君の御楯みたてと起ちて、
たくましく、
ををしく生きぬ。
いざ、今日よりは
母のふところに歸りて、
安らかに眠れ、
幼かりし時

わが乳房ちぶさにすがりて、
すやすやと眠りしごとく。

四 稻むらの火

「これは、ただごとでない。」
とつぶやきながら、五兵衛は家から出て来た。今の地震は、別に激しいといふほどのものではなかつた。しかし、長い、ゆつたりとしたゆれ方と、うなるやうな地鳴りとは、年取つた五兵衛に、今まで経験したことのない、無氣味なものであつた。

五兵衛は、自分の家の庭から、心配さうに下の村を見おろした。村では、豊年を祝ふよひ祭の支度に心を取られて、さつきの地震には、一向氣がつかないもののやうである。

村から海へ移した五兵衛の目は、たちまちそこに吸ひつけられてしまつた。風とは反對に、波が沖へ沖へと動いて、見る見る海岸には、廣い砂原や、黒い岩底が現れて来た。

「大變だ。津波つなみがやつて来るに違ひない。」と、五兵衛は思つた。このままにしておいたら、四百の命が、村もろとも一のみによられてしまふ。もう、一刻もぐづぐづしてはゐられない。

「よし。」

と叫んで家へかけ込んだ五兵衛は、大きなたいまつを持ってとび出して来た。そこには、取り入れるばかりになつてある、たくさんの稲束が積んである。

「もつたいないが、これで村中の命が救へるのだ。」

と、五兵衛はいきなりその稲むらの一つに火を移した。風にあふられて、火の手がぱつとあがつた。一つまた一つ、五兵衛はむちゆうで走つた。かうして、自分の田のすべての稲むらに火をつけてしまふと、たいまつを捨てた。まるで失神したやうに、かれはそこに突つ立つたまま、沖の方を眺

めてゐた。

日はすでに没して、あたりがだんだん薄暗くなつて来た。稲むらの火は、天をこがした。山寺では、この火を見て早鐘をつき出した。

「火事だ。莊屋しやうやさんの家だ。」

と、村の若い者は、急いで山手へかけ出した。續いて、老人も、女も、子どもも、若者のあとを追ふやうにかけ出した。

高臺から見おろしてある五兵衛の目には、それが蟻ありの歩みのやうにもどかしく思はれた。やつと二十人ほどの若者が、かけあがつて来た。かれらは、すぐ火を消しにかから

うとする。五兵衛は、大聲にいつた。

「うつちやつておけ——大變だ。村中の人に来てもらふんだ。」

村中の人はおひおひ集つて來た。五兵衛は、あとからあとからのぼつて來る老幼男女を、一人一人數へた。集つて來た人々は、もえてゐる稲むらと五兵衛の顔とを代る代る見くらべた。

その時、五兵衛は、力いつぱいの聲で叫んだ。

「見ろ。やつて來たぞ。」

たそがれの薄明かりをすかして、五兵衛の指さす方を一同は見た。遠く海の端に、細い、暗い、一筋の線が見えた。その線は、見る見る太くなつた。廣くなつた。非常な速さで押し寄せて來た。

「津波だ。」

と、だれかが叫んだ。海水が、絶壁のやうに目の前にせまつたと思ふと、山がのしかかつて來たやうな重さと、百雷の一時に落ちたやうなとどろきとで、陸にぶつかつた。人々は、われを忘れて後へとびのいた。雲のやうに山手へ突進して來た水煙のほかは、一時何物も見えなかつた。

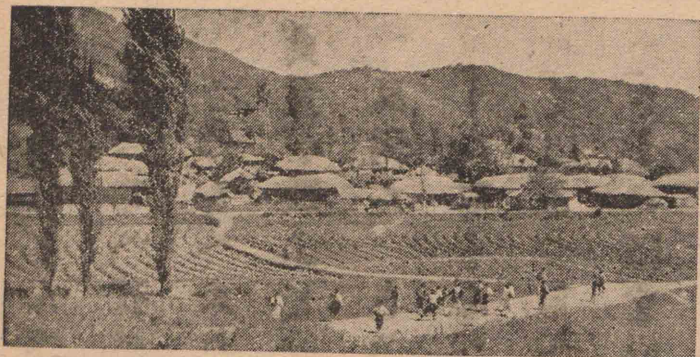
人々は、自分らの村の上を荒れくるつて通る、白い、恐しい

海を見た。二度三度、村の上を、海は進みまた退いた。高臺では、しばらく何の話し聲もなかつた。一同は、波にゑぐり取られてあとかたもなくなつた村を、ただあきれて見おろしてゐた。

稻むらの火は、風にあふられてまたもえあがり、夕やみに包まれたあたりを明かるくした。始めてわれにかへつた村人は、この火によつて救はれたのだと氣がつくと、ただだまつて、五兵衛の前にひざまづいてしまつた。

五 朝鮮のみなか

秋



秋の空は、實に高い。さうして色が深い。紺青こんじやうの大空には、晝の月がうつすらと出て、日は西へ傾きかけてゐる。もろこしの葉をかさかさど秋風がゆるする。

秋の日をまともに受けた駐在所ちゆうじよの庭で、一郎と貞童ていどうが遊んでゐる。貞童が萩はぎのはうきでとんぼを追ひかけると、とんぼはすいとそれて、豆島の方へ飛んで行つてしまつた。

「どんぼ、どんぼ、

あつちへ行けば地獄ぢごく、

こつちへ来れば極樂ごくらく。」

貞童が歌ふと、一郎は

「反對だ。きみ、どんぼを取るんだらう。」

「うん、取るんだ。」

「では、こつちへ来れば地獄ぢやないか。」

「さういはないと取れないよ。」

二人は笑ひながら、豆畠の方へ走つて行く。豆が、かさかさ
と音をたてる。

どの家も、オンドルをたきだしたと見えて、紫色の煙が村
中にただよつてゐる。その煙の中に、ばかりばかり、わら屋
根が浮いて見える。まだ西日を受けてゐる屋根に、干して
あるたうがらしが真赤だ。高くのびたポプラや、茂つたア
カシヤは、あざやかな黄色。櫻も紅葉して、みんな赤い夕日
を受けてゐる。

一郎と貞童は、どんぼ取りをやめて歸つて来た。

「生かしておかうや。」

貞童は、豆の葉の柄で作つた虫かごに、どんぼを入れた。
「動かないよ。」

二人は、じつととんぼを見てゐる。市場歸りの朝鮮馬が、け
たたましく鳴いて過ぎる。夕べの光をかすかに残した大
空を、雁がんの群が渡つてゐる。

「雁、雁、わたれ。」

大きな雁はさきに、

小さな雁はあとに、

仲よくわたれ。」

一郎と貞童が、空に向かつて歌つた。

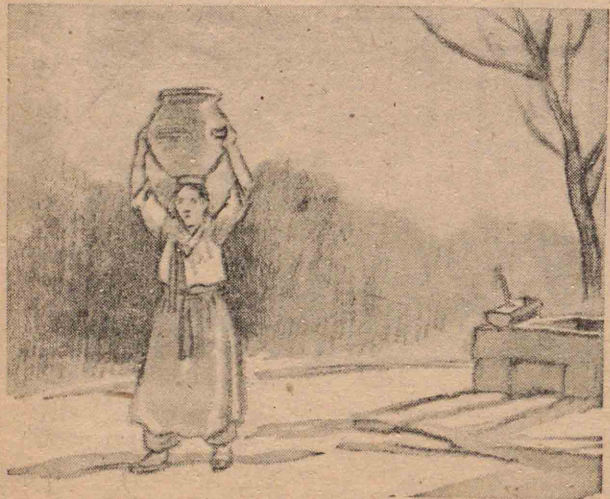
冬の夜

夜になつても薄青い空。その空に、星がいつぱいこぼり

ついたやうにして、またたいてゐる。井戸端のうるしの木
が、ぬうつと立つてゐる。

ぽこん、ぽこんといふ音が通つて行く。水汲みに来た女
の頭の上の水が、めがゆれて鳴る音
だ。寒さが骨身にしみて、いんと
する。

オンドル部屋の中では、薄暗いラ
ンプの火が、心細くゆれてゐる。お
ぢいさんが、孫を寝つかせようとし
て話をしてゐる。



「この村に、古いけやきの木があるだらう。おばけが、あのけやきにゐた。」

「それがどうしたの。」

「そばを通る子どもに、いたづらをしました。」

「どうして、いたづらをしたの。」

「いたづらさきのおばけだからさ。」

「どんないたづらをしたの。」

おぢいさんは、口をむにやむにやさせて、なかなか答へない。ふくろふの鳴く聲が聞える。



別な部屋では、息子を相手に、父がかますを織つてゐる。

「これが五枚めだつたな。」

「はい、五枚めです。」

「どうだ、六枚織れるか。」

「織りませう、おとうさん。」

息子が元氣に答へる。話しながらも、二人の手が器用に動く。そばでは、母が、娘を相手にきぬたを打つてゐる。

「これだけ、たたいてしまはう。」

母が棒を取つて、とんとひやうしを取つた。とんからとんから、調子のよい音が流れ出した。

六月の世界

望遠鏡で見た月

「きみ、今夜うちへ来ないか。」

学校の門を出ると、正男くんがぼくにかういつた。

「どうして。」

「にいさんが天體望遠鏡を作つたんだ。」

「ほう。」

「月がすばらしいよ。よかつたら見に来たまへ。」

夕方、まだ明かるい空に、半月が光り始めた。おかあさん

にさういつて、夕飯がすむとすぐ出かけた。

行つてみると、正男くんのうちでは、もう縁先に望遠鏡を
すゑつけて、にいさんと正男くんが、代る代る観測をしてあ
る。長さ一メートルばかりの望遠鏡が、三脚さんかくの上につて
ある。

「りつばな望遠鏡ですね。」

と、ぼくがにいさんにいふと、正男くんは

「これでにいさんのお手製なんだ。見たまへ、筒つつはボール
紙だらう。三脚は、やつときのふできあがつた。ぼくも、
ずあぶん手傳つたよ。」

「レンズは。」

「買ったのさ。レンズは、たいぶ上等なんだ。」

正男くんは、さも自分で買ったやうな口振りで、いふ。にいさんは、初めからにこにこしながらたまつてゐた。

「さあ、きみものをぞいてごらん。」

と、正男くんにいはれて、ぼくは望遠鏡に目を近寄せた。

望遠鏡の圓い視野に、月がくつきりと浮き出して見える。それは肉眼で見るとすつかり感じが違つて、今に露でもしたりさうななまなましい、あざやかな美しさである。

「きれいだなあ。」

ぼくが思はず叫ぶと、正男くんが、

「きれいだらう。」

と、あひづちを打つやうにいふ。だが、よく見ると、月の表面は決してなめらかではない。一面にざらざらしたやうな感じである。殊に、半月のかけた部分に近く、蜂はちの巣すを思はせるやうなでこぼこが目立つて見える。

「月の顔には、ずゐぶんあばたがあるね。」

と、ぼくがいつたので、いさんも正男くんも笑つた。

それから、三人代る代るのぞきながら、いさんからおもしろい説明を聞いた。

にいさんの説明

あのあばたのやうに見えるのは、大部分が火山で、穴は噴火口です。こんな小さな望遠鏡でさへ、はつきり見えるのですから、噴火口は、非常に大きなものだといふことが考へ



られます。いちばん大きなのは、直徑が二百キロもあるといはれてゐます。かうした火山は、どれもこれもけはしくて、低いのも三百メートル、高いのになると八千メートル——富士山の二倍以上もあるのが

あります。もちろん、月は地球と違つて、とつくの昔、すっかり冷えてしまつた天體ですから、火山といつても、みんな死火山ですがね。

それから、よく見なさい。月の中に薄黒い、大きな斑點のやうなものがあるでせう。あれは海といはれる部分ですが、月には水が一しづくもありませんから、海といふより、平原といつた方がよいかも知れません。たぶん、昔、このたくさんな火山からふき出した熔岩が、流れて固まつたものでせう。

月には水がないといひましたが、水ばかりか、空気もない

のです。したがつて、雲や、雨や、あらしや、さういつた、この地球上に見られる氣象現象は、一つもありません。月は、いつも晴天なのです。この望遠鏡で見てもわかるやうに、月のどこ一つくもつたところがないのが、その證據です。しかも、空氣も水もないとすると、地球上のやうに、太陽から來る光や熱を調節するものがないから、月の世界では、晝はこげつくやうな暑さ、夜はその反對に、ひどい寒さであらうと思はれます。

まだおもしろいことがあります。かりに、私たちが月の世界へ行つたとすると、そのけしきはどんなものでせう。

今もいふやうに、光を調節するものがないから、太陽に照らされた部分は、目が痛いほど光つて見えるでせうが、陰になる部分は、きつと眞黒に見えるに違ひない。ごつごつした火山が、到るところにそびえて、それが眞黒な大空に突つ立つてあるとしたら、どんなに恐しいけしきでせう。もちろん、草も木もありませんよ。その代り、一つうらやましいと思ふのは、月から見た地球の美觀です。地球の直徑は、月の約四倍ありますから、夜、月から地球を見るとすると、われわれが常に見る月の四倍ぐらゐな地球が、天にかかつて見えるわけです。

かういふふうに、月の世界はいはばまつたく恐しい死の世界ですが、それでゐて、昔から月ほどやさしい、平和な氣持を與へてくれるものはありません。その青白い、しみじみと親しめる光が、われわれに大きな慰めを與へるからです。殊に日本では、昔から月と文學が、まつたく離れられないものになつてゐます。ごらんなき、歌でも、俳句でも、詩でも、月に關するものがどんなに多いか。月の世界に都があつて、そこで天人が舞つてゐるなどは、實に美しい想像です。今日私たちは、それが死の世界であると知つても、やはり月がなかつたらさびしい。峯の月、大海原の月、椰子の木かげの月、さういふものがないとしたら、ほとんど生きがひがないと思ふでせう。月は、永久に人間の心の友であり、慰めてあります。

七 柿の色

かま場より出でし喜三右衛門は、しばし縁先にやすらひぬ。

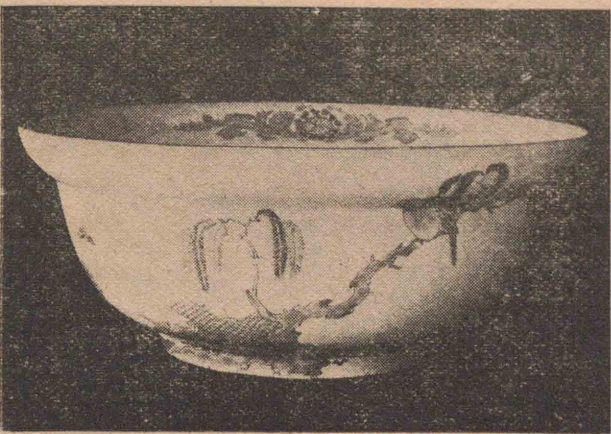
日はやや西に傾けり。仰げば庭前の柿の梢は、大空に墨繪をゑがき、すずなりの赤き實、夕日を浴びて、さながら珊瑚珠のかがやくに似たり。この美しさに、しばし見とれたる

喜三右衛門は、ふと何思ひけん、

「おお、それよ。」

とつぶやきて、直ちにまたかま場へ引き返しぬ。

その日より、喜三右衛門は、赤色の焼きつけに熱中し始めたり。されど、めざす色はたやすく現るべくもあらず、いたづらに焼きてはくたき、くたきては焼き、はてはただばう然として、歎息するばかりなり。



苦心は、そのみにあらざりき。研究に費す金はしだい

にかさみ、しかも工夫に心をうばはれては、おのづから家業もおろそかならざるを得ず。やがて、その日の生計も立ちがたく、弟子たちこの師を見かぎり去りて、手助けをする者一人もなし。人はこの様を見て、たはけとあざけり、氣違ひどののしる。されど、喜三右衛門は、動かざること山のごとく、一念ただ夕日に映ゆる柿の色を求めて止まざりき。かくて數年は過ぎたり。ある日の夕べ、あわたたしくかま場より走り出でたるかれは、

「たき木、たき木。」

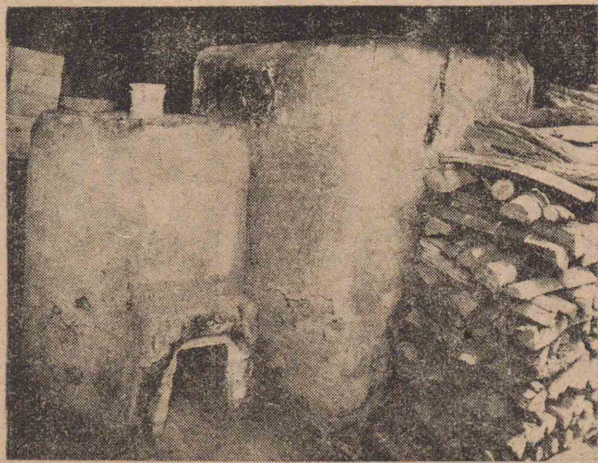
と叫びつつ、手當りしだいに物を運びて、かまの火にことごと

とく投じたり。

その夜、喜三右衛門は、かまのかたはら
を離れざりき。鶏の聲を聞きては、
はや心も心にあらず。かまの周圍を、
ぐるぐるどめぐり歩きぬ。

夜は、やうやく明けはなれたり。胸
ををどらせつつ、やをらかまを開かん
とすれば、今しも朝日、はなやかにさし
出でて、かま場を照らせり。

一つまた一つ、血走る眼に見つめつつ、かまより皿を取り



出しめたるかれは、やがて「おお」と力ある聲に叫びて、立ちあ
がりぬ。

ああ、多年の苦心は、つひに報いられたり。かれは、一枚の
皿を両手にささげて、しばしかま場にこをどりしぬ。

喜三右衛門は、やがて名を柿右衛門と改めたり。

柿右衛門は、今より三百餘年前、肥前の有田ありたに出でし陶工
なり。かれは、その後いよいよ研究を重ね、工夫を積み、つ
ひに柿右衛門風と呼ばれる、精巧なる陶器を製作するにい
たれり。その作品は、ひとりわが國にもてはやさるるのみ
ならず、遠く海外にも傳はりて、名工のほまれはなほ高し。

八 初冬二題

ゆず

今年も隣りのゆずが黄ばんだ。

かんとさえた冬空

太陽がまぶしく仰がれる。

かさこそと

竹竿であの木の梢をつついてゐた

隣りのをぢさんは今ゐない。

からたちの垣根越しにふとほほ笑んで

「あげようか」と投げてくれた

をぢさんはよい人だった。

あの時、ざくつとおや指を皮に突き立てたら、

しゆつと、しぶきがほとばしつて、

爪つめを黄いろく染めたものだった。

なつかしいゆずのかをり、

わたしは、じつと梢を仰ぎ見た、

今は部隊長になつて、

戦地へ行つてゐるをぢさんを思ひながら。

朝飯

新づけの白菜

何といふみづみづしさであらう。

かめばさくさくと齒切れよく、

朝の氣分を新たにする。

父も、母も、兄も、妹も、

だまつて箸を動かしてゐる。

そろつて健康に働く家族の、

楽しい朝飯だと思へば、

あたたかい御飯の湯氣が、

幸福に、私たちの顔を打つ。

明けて行く朝

窓ガラス越しに、林が黒い。

からからと、どこかで荷車の音。

白い御飯から、

あたたかいみそ汁から、

ほかほかと、立ちのぼる湯氣を見つめながら、

私は、さくさくと白菜をかむ。

九 十二月八日



昭和十六年のこの日こそ、われわれ日本人が、永久に忘れることのできな
い日である。

この朝、私は、ラジオのいつもと違つた
た聲を聞いた。さうして、

「帝國陸海軍は、本八日未明、西太平洋において、米英軍と戦闘状態に入れり。」

といふ臨時の知らせを聞いて、はつとした。

私は、學校へ急ぎながらも、胸は大波のやうにゆれてゐた。勇ましいやうなほこらしいやうな、それでゐて、底の底には、何か不安な氣持があることを知つて、

「いつ、米英の飛行機が飛んで来るかも知れないのに、こんなことでもどうするか。」

と、自分で自分を勵ました。

朝禮の時間に、校長先生から、戦争の始つたことについてお話があつた。

「東亞におけるわが國の地位を認めず、どこまでも横車を

押し通さうとした米國及び英國に對して、日本は敢然と立ちあがつたのです。いよいよ、來るものが來たのです。私たちはもうとつくに、覺悟がきまつてゐたはずです。初冬の澄みきつた日ざしが、運動場を照らし、窓を通して教室にさし込んでゐた。

四時間めに、みんなは講堂へ集つた。さうして、その後のやうすをラジオで聞いた。

「ハワイ空襲」とか、「英砲艦撃沈」とか、「米砲艦捕獲」とか、矢つぎ早の勝報である。みんな胸にこみあげるうれしさを押しさへながら、熱心に聞き入つた。

お晝過ぎには、おそれ多くも今日おくだしになつた宣戦の大詔が、ラジオを通して奉讀された。君が代の奏樂ののち、うやうやしく奉讀されるのを、私たちは、かしまつて聞いた。

おことばの一言一句も、聞きもらすまいとした。そのうちに、私は、目も、心も、熱くなつて行くのを感じた。

「天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇」と仰せられる國がらの尊さ。この天皇の御ためなればこそ、われわれ國民は、命をささげ奉るのである。さう思つたとたん、私は、もう何もいらなひと思つた。さうして、心の底

にあつた不安は、まるで雲のやうに消え去つてしまつた。

「皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ。」

と仰せられてゐる。私は神武天皇の昔、高倉下たかくらじが神劔を奉り、金のとびが御弓の先に止つたことを思つた。天照大神が瓊瓊杵尊にぎひみことにくだしたまうた神勅を思つた。神様が、この國土をお生みになつたことを考へた。

さうだ。私たち國民は、天皇陛下の大命を奉じて、今こそ新しい國生みのみわざにはせ參じてゐるのである。勇ましい皇軍はもとより、國民全體が、一つの火の丸となつて進む時である。私たち少國民も、この光榮ある大きな時代に生きてゐるのである。

私は、すっかり明かるい心になつて、學校から歸つた。うちでも、母は、ラジオの前で戦況に聞き入つてゐた。

「おかあさん、私は、今日ほんたうに日本の國のえらいことがわかりました。」

といふと、母も、

「ありがたのおことばを聞いて、まるで天あめの岩戸があけたやうな氣がしますね。さあ、私たちも、しつかりませうよ。」

といつて、目に涙をためながら、じつと私を見つめた。

十 不沈艦の最期

一

十二月九日の晝過ぎである。

飛行基地の兵舎では、各攻撃隊の指揮官たちが、しきりに作戦をねつてゐる。シンガポール軍港にある英國東洋艦隊旗艦プリンスオブウェールズと、戦艦レパルスを、どうしても撃滅しなければならぬ。だが、敵は軍港深くたてこもつて、出港するけはひがない。いつそのこと、こつちから出かけて行つて、軍港内の主力艦をたたきつけるか。さうだ、

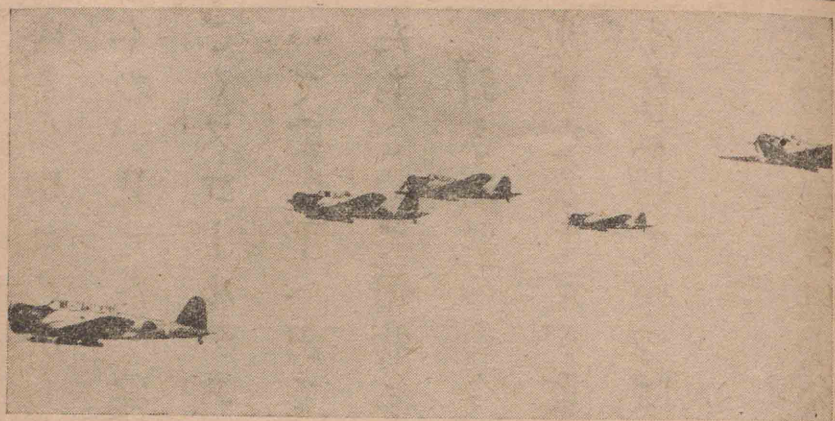
明日こそ――

この時であつた。哨戒中のわが潜水艦から、「敵艦発見」の第一電が来た。一同、思はず總立ちとなつた。

「各部隊、直ちに出發用意。」

の命令が、八方へ飛ぶ。

いよいよ出發といふ時は、日没までわづか一時間餘りしかなかつたが、各部隊は、こをどりして基地を飛び立つた。のぼつても、のぼつても、雲である。時



時、その切れめから海が見える。わが輸送船が南下して行くのが見えた。雲はますますこくなり、雲の下ではものすごくスコールがあばれてゐる。めざす地點に来て、雨をついて雲の下へ出てみたが、敵艦の影はなく、やがて夕やみがたちこめて、何物も見ることができなくなつた。

「引き返せ」の命令が出た。むちゆうで飛んで来たのが、歸りとなると足が重い。妙につかれたやうな腹立たしいやうな氣持でいつばいであつた。

二

十日三時四十分待ちに待つたわが潜水艦から「敵艦發見」の第二電が来た。今日こそはと、だれの目にも固い決意がひらめく。整備員は、燃料積み込みに大わらはである。

全員整列。ほんのりと夜のとばりが明けて行かうとする基地で、出撃の訓示をする司令の目は、きらきらと光つてゐる。

「千載一遇の好機である。全力をつくせ。」

「はい、死んで歸ります。」

訓示に答へるやうに、全員のまなざしがかういつてゐる。死といふものが、この時ほど容易で、當然に思はれたことになかつた。

今日も雲が多い。まづ偵察機隊が出発し、八時を過ぎて大編隊は、數隊に分れて次々に南へ飛び立つた。進むに従つて空は明かるく、眼下に點々と白い斷雲がかかる。

何時間か飛んで、まさしく潜水艦の報告した地點まで来たには来たが、どこにも敵艦らしいものは見えない。ただ、青い海原がはてしなく續くだけである。止むなく反轉する。

三

「敵主力艦見ユ。北緯四度、東經百三度五十五分。」

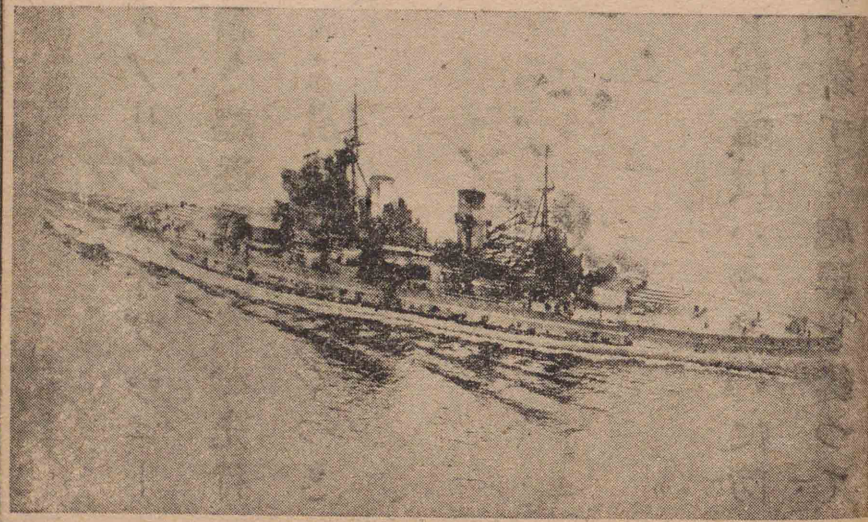
まさしく、わが偵察機の報告である。

反轉しつつあつたわが隊は、この報をとらへて一路機首を北へ向け、めざすクワンタン東方八十キロメートルの洋上へ、まっしぐら。

續いて、第二報があつた。

「敵主力ハ、驅逐艦三隻ヨリ成ル直衛ヲ配ス。」

機内に、どつと喜びの聲があがる。搭乗員の目は一つになつて、海の上



へ焼きつくやうに注がれる。

おお、見よ。英國が最新鋭をほこるプリンスオブウェールズを一番艦に、レパルスがこれに續き、驅逐艦三隻が先行してゐるではないか。各艦のけたてる眞白な波が、くつきりと目にしみる。

四

十二時四十五分、

「突つ込め。」

の命令である。高度をさげて行くと、敵艦は、いつせいに防空砲火を撃ち出す。すきまもなく炸裂する砲弾を縫つて、

たちまち爆弾を投下した。大型爆弾が、レパルスに吸ひ込まれるやうに落下すると思ふと、みごとに後部甲板かんぼんに命中する。こげ茶色の煙とともに、火焰くわえんがばつともえあがつた。われわれ爆撃機隊は、更に大きく弾幕の中をめぐつて、二度めの爆撃に移る。と、この時わが雷撃機の第一隊が敢然と現れた。

雷撃機隊は、たちまち二隊に分れた。一隊は右からウェールズへ他の一隊は左からレパルスへ襲ひかかる。

防空砲火は、必死である。ざあつ、ざあつとスコールのやうに、弾丸の幕が行く手をさへぎる。炸裂する弾の破片が、

海上一面にしぶきを立ててゐる。

まことに、死の突撃である。だが、わが機は、まるで演習でもするやうに落ち着いて、極めて正確に、次々と襲ひかかった。

一番機が海面すれすれにおりて發射した魚雷が、みごとにウエールズに命中して、胴體からマストの二倍ほどある水柱があがつた。と見るまに、機は艦橋をすれすれに飛び越えながら、激しい掃射を浴びせかける。

レパルスへ襲ひかかつた一番機の魚雷も、命中する。

兩戦艦は、ちやうど大きな鯨がもりを食つてあばれるやうにもがきながら、大きく針路を變へた。ウエールズは右へ、レパルスは左へ。

すかさず、二番機、三番機が、二艦の針路をねらつて、それぞれ右から左から魚雷を發射した。

ウエールズを襲つた二番機が、魚雷を放つてその右舷前方にさしかかつた時、機はぱつと赤い火を吐きながら、火だるまになつて自爆した。それと同時に、魚雷はウエールズの舷側で、みごとに大きな水柱と火焰をあげた。

五

第二、第三の雷撃機隊が、次々に現れて攻撃にかかる。深

手を負つたウェールズは、見る見る傾き始めた。四十五度まで傾いて、あはや沈むと思ふとたん、ふしぎにもむくむくと起き直つた。さすがに、不沈をほこるだけのねばりがあると思はせる。

レパルスは、速力がぐつと落ちてウェールズの後方、二千五百メートルの海上にある。艦はすでに火災を起してゐたが、砲火はほとんど衰へない。襲ひかかるわが一機が、火だるまになる。その自爆と同時に、魚雷がレパルスに命中する。續いてまた一機、これも自爆と命中といつしよである。それを見るたび、

「おのれ。」

と、一時に怒りがこみあげる。しかし、それも直ちに消えて、「あありつばだ。りつばな最期だ。」

といふ感じに變る。直立して、この勇士に別れを告げた。高角砲の目もくらむやうな光の中で、レパルスの水兵が甲板に倒れてゐる姿が、はつきり見えた。わが爆撃機隊の



掃射を避けるやうに右手で顔をおほつてゐる兵もあつた。大きくめぐつてふり返ると、やがてレパルスの最期が来た。一つ大きくゆれたと見る瞬間、しんかんもくもくと黒煙を残した。ただけで海中に沈没した。

「やつたぞ。やつたぞ。二番艦がレパルスが沈んだぞ。」
機内總立ちになり、「萬歳」を連呼する。この歡喜を胸いつぱいにいただきながら、われわれ爆撃機隊は引きあげて行つた。

六

わが偵察機は、なほも大空をめぐりながら、旗艦ウエールズの最期を見とどけた。

プリンスオブウエールズは、中央と艦尾から煙を吐きながら、ハノツトぐらゐの速力で走つてゐた。船體は、ぐつと左へ傾いてゐる。そのすぐあとから、驅逐艦がついて行く。まもなくウエールズの速力は急に落ちてほとんど停止したかと思はれた。驅逐艦が寄りそふやうに、傾いたウエールズにぴたりと横着けになつた。そのとたん、ウエールズから爆發の一大音響が起り、火焰が太く、大きく立ちあがつた。續いてもう一度爆發するとともに、不沈艦は、艦尾からするするとマライの海へのまれて行つた。

あたり一面油の海に、南の太陽がきらきらと光つてゐた。

基地へ歸ると司令は泣いてゐた。大任を果したわれわれ搭乗員も泣いた。地上勤務の者も泣きながら走り寄つて、われわれの手をにぎつた。押さへきれない、あらしのやうな感動が、全員の胸を走りまはるのであつた。

それから三日め、われわれの一隊は、もう一度あの戦場の上空を飛んだ。直下には、何事もなかつたやうに、青い波頭がかがやいてゐた。この波頭へ向けて、大きな花束を落した。

「敵ながら、最後まで戦ひぬいた數千の靈よ。靜かに眠れ。」といふ、われわれの心やりであつた。

十一 世界一の織機

「機ばかりいじつてゐて、をかしなやつだ。男のくせに。」豊田^{とよだ}佐吉は、村の人々から、かういつてあざけられた。佐吉は、父の大工の仕事を助けて働いてゐたが、ひまさへあれば、織機のことを調べ續けてゐたのである。

「いよいよ、あれは氣違ひだ。」

村中にこんなうはさがひろがると、父も、だまつてはゐなかつた。

「おまへは大工のせがれた。ほかのことを考へないで、みつしり仕事をやつてくれ。」

とさとしたが、佐吉のもえるやうな研究熱はどうすることもできなかつた。父はどうとう佐吉をよその大工の家にあづけてしまつた。

この間に立つて、佐吉を勵ましたり、慰めたりしてくれたのは母であつた。佐吉は、今にきつと成功してみせます。しばらくお許しください」と心の中で深く両親にわびた。

佐吉の考へは、かうであつた。人間の衣食住といふものはみんな大切なものであるから、布を織る仕事も、決してゆるがせにしてはおかれない。今のやうな仕方ではみんながきつと困る時が来るに違ひない。それには、どうしても、織機をもつともつと進歩させなければならぬといふのである。

佐吉が、最初目をつけたのは、布を織る時、たて糸の間を縫つて行くよこ糸であつた。よこ糸は、杼ひによつて、右から左、左から右へと往復するのであるが、これを人の手によらず、機械の力で動かすやうに工夫したかつた。機械で動かせば、もつと早く往復するやうな仕組みになるだらう。更に進んでは、ひとりで、布がずんずん織られて行くやうにも

なるであらう。次から次へと、佐吉の考へは高まつて行つたが、わづか小學校を出ただけのかれには、ややもすれば、手のとどきさうもない空想になりがちであつた。

たまたま、そのころ東京に博覽會が開かれた。佐吉は上京して、目をかがやかしながら、その機械館へ毎日通つた。銀色に光つたたくさんの機械は、まるで生き物のやうに動いてゐた。かれは、その精巧な機械を見て感心するとともに、何ともいへない肩身のせまい思ひがした。機械は、どれ一つとして、わが日本製のものでなかつたからである。

「こんなことでいいのか。日本の將來をどうするのだ。」

佐吉は、もうじつとしてゐられなくなつた。

せめて自分のめざしてゐる織機を仕あげて、いつかは、外國を見返してやらうと固く決心した。

それからは、ほとんど晝も夜もなかつた。設計圖を引いては、組み立てた。組み立てては、それを動かしてみた。だが、思ふやうに動くものは、なかなか生まれて來なかつた。

佐吉は、一軒の納屋に閉ぢこもつて、一心に考へぬき、これならといふ一臺の織機を作りあげたが、これもまんまと失敗であつた。世間からは、ますます笑はれて、だれ一人相手にさへしなくなる。貧しさは、ひしひしと身にせまつて來る。

しかし、佐吉は「このくらゐのことでは弱るものか」と、新しい勇氣をふるつて立ちあがつた。

鐵材を使ふことができなかつたために、すべて木材によつてこまかなところまで作り直して行つた。今までの失敗の原因を、みんな取り除いて、面目を一新した設計圖ができたあがつた。さつそく、その組み立てに取りかかり、苦心の末、やつと思ひ通りの織機ができあがつた。驗してみると、はたしてよく動いた。

この織機を、村の人々の前で、試運轉する日がやつて來た。黒山のやうに集つた人たちは、布をみごとに織つて行くふしぎな機械に目を見張つた。

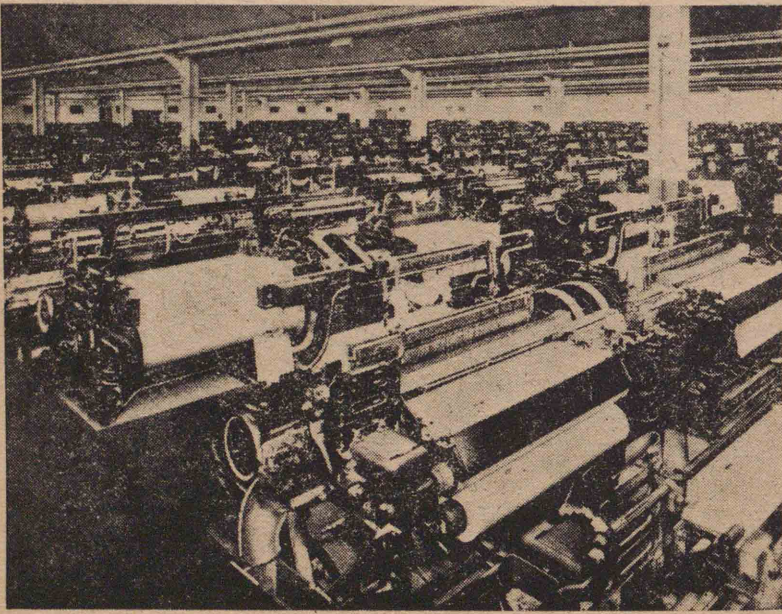
「よくやつた。えらいものだ。」

みんなは、かういつてほめたたへた。この日、佐吉の織機を操つて、りつぱに布を織つてみせた人こそ、佐吉の母であつた。明治二十三年、佐吉が二十四歳の時のことである。

翌年、特許を得た。豊田式人力織機は、盛んに國內に使用されるやうになつた。しかも、かれはこれに満足せず、すぐ動力機械の製造にとりかかつた。人の力から、機械の力に移すといふ、多年の夢を實現しようといふのである。そこで更に七年間の工夫が續けられ、みごと佐吉の自動織機が

完成された。これが日本における自動織機の始祖である。明治三十八年は佐吉にとつて忘れることのできなない年である。そのころわが國で使はれてゐた外國製の自動織機と佐吉の自動織機とどちらがすぐれてゐるかを驗すことになつたのがこの年であつた。いはば日本と外國との腕比べである。英國製のものを五十臺、米國製のものを十臺、佐吉のものを五十臺すゑつけて一年にわたる嚴しい比較試験が行はれた。だが、その結果は惜しいことに佐吉の負けであつた。かれは、愛機の敗因を根氣よく調べ、更に新しい工夫をこらして行つた。

それから四年め、再び外國製のものと腕比べをする日が來た。努力はつひに報いられた。何千本といふたて糸のうち、一本でも切れると織機はおのづから止り、よこ糸がなくなれば、新しい杼が代つてとび出して行くなど、まことに簡にして巧みなものであつた。機械の取扱ひがたやすく、故障が少く、絶えず正確に動くことにお



いて、佐吉のものに及ぶものはなかつた。

押しも押されもしない「世界一の織機」といふ光榮が、かれの上にかがやいた。この自動織機の出現によつて、日本はあつぱれ綿布工業國として、世界に乗り出すやうになつた。何千臺といふ自動織機が勢ぞろひをして、いつせいに活動し、すばらしい速さで織り出す光景は、見るからに壯觀である。流れ出る綿布を見てみると、あたかも豊田佐吉の愛國的熱情が、ほとばしつてゐるやうにさへ感じられる。

十二 水師營

明治三十八年一月五日午前十一時——この時刻を以つて、わが攻圍軍司令官乃木大將と、敵の司令官ステツセル將軍とが會見することになつた。

會見所は、旅順から北西四キロばかりの地點、水師營の一民屋である。附近の家屋といふ家屋は、兩軍の砲彈のために、影も形もなくなつてゐた。この一民屋だけが残つてゐたのは、日本軍がここを占領してから、直ちに野戦病院として使用し、屋根に大きな赤十字旗をひるがへしてゐたからである。

前日、壁に残つてゐる彈のあとを、ともかくも新聞紙で張

り、會見室に當てられた部屋には、大きな机を用意し、眞白な布を掛けた。

下見分をした乃木將軍は、陣中にふさはしい會見所の情景にはほ笑んだが、壁に張つてある新聞紙に、ふと目を注いで、

「あの新聞紙を、白くぬつておくやうに。」

といった。新聞紙は、露軍敗北の記事で満たされてゐたからである。

さきに一月一日、ステツセル將軍は、わが激しい攻撃に守備しきれなくなつて、つひに旅順開城を申し出て來た。乃

木將軍はこの旨を大本營に打電し、翌日、兩軍代表は、旅順開城の談判をすましたのであつた。

その夜、山縣參謀總長から、次のやうな電報があつた。

「敵將ステツセルより開城の申し出でをなしたるおもむき伏奏せしところ、陛下には、將官ステツセルが祖國のため、に盡くしたる勳功をよみしたまひ、武士の名譽を保持せしむることを望ませらる。右つつしんで傳達す。」

そこで三日、乃木將軍は、津野田參謀に命じて、この聖旨を傳達することにした。命じられた津野田參謀は、二名の部下をつれて、ステツセル將軍のところへ行つた。

ステツセル將軍は、副官にいひつけて、軍刀と帽子と、手袋
どを持つて來させ、身支度を整へてから不動の姿勢を取つ
た。津野田參謀が、御沙汰書ごさたがしよを讀みあげると、副官はこれを
ロシヤ語に譯して傳達した。

ありがたく拜受したステツセル將軍は、

「日本の天皇陛下より、このやうなもつたいないおことは
をいただき、この上もない光榮であります。どうぞ、乃木
大將に願ひして、陛下に厚く御禮を申しあげてくださ
い。」

といつて、うやうやしく舉手の禮をした。乃木將軍が、

たむかひしかたきも今日は、大君の恵みの露にうるほひ
にけり

とよんだのは、この時である。

四日に、乃木將軍は、ステツセル將軍に、ぶだう酒や、鶏や、白
菜などを送りどけた。長い間籠城ろうじやうしてゐた將士たちに、
このおくり物がどれほど喜ばれたことか。

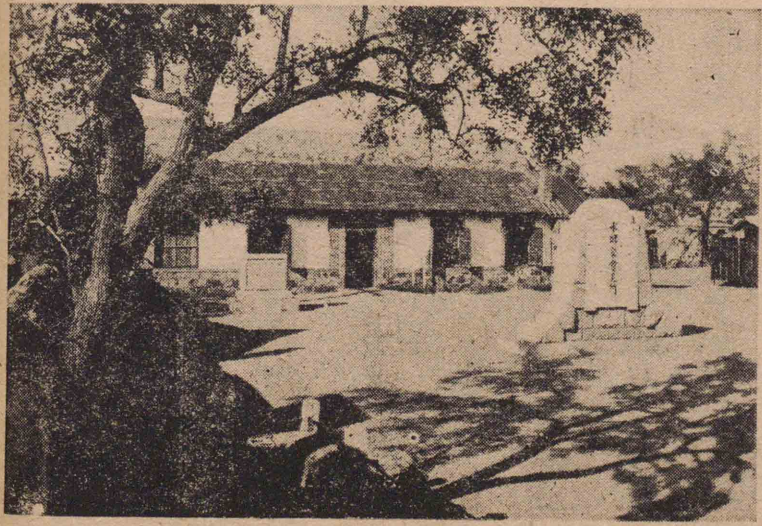
會見の當日は、霜しもが深かつたが、朝からよく晴れてゐた。

十一時十分前に、ステツセル將軍が會見所に着いた。白
あし毛あしげの馬に、黒い鞍くらを置いて乗つてゐた。その後、水色
の外套ぐわいたうを着た將校が四騎續いて來た。

土堀どぼで圍まれた會見所に入り、片すみに生えてゐたなつめの木に、その馬をつないだ。

まもなく、乃木將軍も、數名の幕僚ばくれうとともに到着した。

乃木將軍は、黒の上着に白のズボン、胸には、金鷄勳章きんしやくんしやうが掛けられてあつた。静かに手をさしのべると、ステツセル將軍はその手を堅くにぎつた。思へばしのぎをけつて戦ひぬいた兩將軍である。



乃木將軍が、

「祖國のために戦つては來たが、今開城に當つて閣下と會見することは、喜びにたへません。」

とあいさつすると、ステツセル將軍は、

「私も、十一箇月の間旅順を守りましたが、つひに開城することになり、ここに閣下と親しくおあひするのは、まことに喜ばしい次第です。」

と答へた。一應の儀禮がすむと、一同は机を取り圍んで着席した。

ステツセル將軍が、

「私のいちばん感じたことは、日本の軍人が實に勇ましいことでした。殊に工兵隊が、自分の任務を果すまでは決して持ち場を離れないえらさに、すつかり感心しました。」
といふと、乃木將軍は、

「いや、ねばり強いのは、ロシヤ兵です。あれほど守り續けた辛抱強さには、敬服のほかありません。」

といふ。

「しかし、日本軍の二十八サンチの砲弾には、弱りました。」
「あまり旅順の守りが堅いので、あんなものを引っぱり出したのです。」

「さすがの要塞も、あの砲弾にはかなひませんでした。コンドラテンコ少將も、あれで戦死をしたのです。」

コンドラテンコ少將は、ロシヤ兵から父のやうにしたはれてゐた將軍で、その日もロシヤ皇帝の旨を奉じて、部下の將士を集めて、激勵してゐたさなかであつた。

「それに、日本軍の砲撃の仕方が、初めと終りとでは、ずぶん變つて來ましたね。變つたといふよりは、すばらしい進歩を示しました。たぶん、攻城砲兵司令官が代つたのでせう。」

「はい、代つては、あません。初めから終りまで、同じ司令

官でした。」

「同じ人ですか。短期間にあれほど進むとは、實にえらい。さすがは日本人です。」

「わが二十八サンチにも驚かれたでせうが、海の魚雷が、山上から泳いで来るのには、面くらひましたよ。」

うちとけた兩將軍の話が、次から次へと續いた。やがてステツセル將軍は、口調を改めて、

「承りますと、閣下のお子様は、二人とも戦死なされたさうですが、おきのどくでなりません。深くお察しいたします。」

とていねいに悔みをのべた。

「ありがたうございます。長男は南山で、次男は二百三高地で、それぞれ戦死をしました。祖國のために働くことができて、私も満足ですが、あの子どもたちも、さぞ喜んで地下に眠つてゐることです。」

と、乃木將軍はおだやかに語つた。

「閣下は、最愛のお子様を二人とも失はれて、平氣でいらつしやる。それどころか、かへつて満足してゐられる。閣下は、實にりつぱな方です。私などの遠く及ぶところで、はありません。」

それからステツセル將軍は次のやうなことを申し出た。
「私は馬がすきで、旅順に四頭の馬を飼つてゐます。今日



乗つてまゐりました馬も、その中の一頭ですぐれたアラビヤ馬です。ついでには今日の記念に、閣下にさしあげたいと思ひます。お受けくだされば光榮に存じます。」
乃木將軍は答へた。

閣下の御厚意を感謝いたします。ただ、軍馬も武器の一つですから、私がすぐいたたくわけにはいきません。一應軍で受け取つて、その上、正式の手續きをしてからいただきますせう。」

「閣下は、私から物をお受けになるのが、おいやなのでせうか。それとも、馬がおきらひなのでせうか。」

「いやいや、決してそんなことはありません。私も、馬は大すきです。さきに日清戦争の時、乗つてゐた馬が弾でたふれ、大變かはいさうに思つたことがあります。今度も、やはり愛馬が弾で戦死しました。閣下から馬をいただ

けば、いつまでも愛養いたしたいと思ひます」

「あ、さうですか。よくわかりました」

「ときに、ロシヤ軍の戦死者の墓は、あちこちに散在してゐるやうですが、あれはなるべく一箇所に集めて墓標を立て、わかることなら、將士の氏名や、生まれ故郷も書いておきたいと思ひますが、それについて何か御希望はありませんか。」

「戦死者のことまで、深いお情をいただきまして、お禮のことばもありません。ただ、先ほども申しましたが、コンドラテンコ少將の墓は、どうか保存していただきたいと思ひます。」

「承知しました。」

やがて用意された晝食が運ばれた。戦陣料理のとぼしいものではあつたが、みんなの談笑で食事はにぎはつた。

食後、會見室から中庭へ出て、記念の寫眞を取つた。

別れようとした時、ステツセル將軍は愛馬にまたがり、はや足をさせたり、かけ足をさせたりして見せたが、中庭がせまいので、思ふやうには行かなかつた。

やがて、兩將軍は、堅く手をにぎつて、なごりを惜しみながら別れを告げた。

十三 元日や

元日や一系の天子不二ふじの山

鳴め雪せう

雪残る頂一つ國くにざかひ

子し規き

島々に灯ひをともしけり春の海

子規

赤い椿白い椿と落ちにけり

碧へき梧ご桐どう

もらひ来る茶わんの中の金魚かな

鳴雪

たたかれて晝の蚊かを吐く木魚かな

漱そく石せき

山門をぎいとどぎすや秋の暮

子規

十四 源氏と平家

宇治川うぢがわの先陣

ころは正月二十日餘りのことなれば比良ひらの高嶺たかねの雪も消え谷々の氷打ち解けて、川水折ふしかさ増したり。白波みなぎり瀬せは高鳴りて、さか巻く水も速かりけり。夜はすでに明け行けど、川霧かはぎり深く立ちこめて、馬の毛も甲の色もさだかならず。

大將軍九郎義經よしつね、川端に打ち出で、水のおもてを見渡して、人々の心を見んとや思ひけん。

「水の引くをば待つべきか。
いかにせん。」

といへば、畠山の次郎重忠、生
年二十一になりけるが進み
出で、

「この川、近江の湖の末にて
候へば、待つとも待つとも
水ひまじ。重忠まづ瀬ぶ
み仕らん。」

とて、五百餘騎ひしひしとく

つわを並ぶ。

ここに平等院のうしとら、橋の小島が崎より、武者二騎引
つ駈け引つ駈け出て來たり。一騎は梶原の源太景季、一騎
は佐々木の四郎高綱なり。人目には何とも見えざりけれ
ど、内々先を争ひけん、梶原は佐々木に四五間ばかり進みた
り。佐々木、

「いかに梶原殿、この川は西國一の大川ぞや。馬の腹帯の
延びて見え候ぞ。しめたまへ。」

といひければ、梶原、腹帯解いて引きしむる。佐々木、その間
につとはせぬいて、川へさつと打ち入れたり。梶原も續い



て入る。梶原、

「いかに佐々木殿。水の底には大綱あるらん。心得たま

へ。」

といひければ、佐々木、刀を抜いて馬の足にかかりたる大綱
どもを、ふつつつと打ち切り打ち切り、宇治川速しといへど
も、生食いけずきといふ日本一の馬に乗りたれば、眞一文字にさつと
渡り、向かふの岸に打ちあげたり。梶原が乗りたる磨墨するすゑは、
川中より押し流され、はるかの下より打ちあげたり。

佐々木、あぶみふんばり立ちあがり、大音聲あげて、

「宇多天皇九代の後胤、近江の國の住人、佐々木の四郎高綱、

宇治川の先陣ぞや。」

と名のりたり。

畠山、五百餘騎にて打ち渡る。向かふの岸より敵の放つ
矢に、畠山、馬の額を射られ、馬はねあがれば、弓杖ユヅエついており
立ちたり。岩波さつと押しかかれども、畠山ものともせず、
水の底をくぐりて、向かふの岸に着きにけり。打ちあがら
んとするところに、後よりむづと引くものあり。「たぞ」と問
へば、重親しげちかと答ふ。

「大串か。」

「さん候。あまりに水が速うて、馬をば川中より押し流さ

れ、これまでたどり着きて候。

と申す。畠山

「汝がやうなる者は、いつも重忠にこそ助けられんずれ。」
といふまま、大串をつかんで岸の上へ投げあげたり。

投げあげられて立ちあがり、太刀を抜いて額に當て、大音
聲あげて、

「武藏むさしの國の住人、大串の次郎重親、宇治川のかち渡りの先
陣ぞや。」

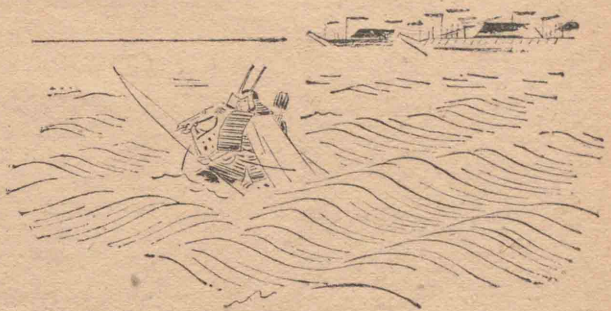
と名のりたり。敵もみかたもこれを聞きて、一度にとつと
ぞ笑ひける。

敦盛あきもりの最期

さるほどに、熊谷くまがひの次郎直實なほざねは、一の谷の軍破れ、平家のき
んだち、助け船に乗らんとて、みぎはの方へ落ち行くらん。
あつぱれ、よき大將に組まん」と思ひ、細道にかかりて、みぎは
の方へ急ぎ行く。

かかるところに、もえぎにほひの甲着て、黄金作りの太刀
をはき、連錢あし毛の馬に乗りたる武者一騎、沖なる船をめ
がけて、海へさつと打ち入れ、泳がせけり。熊谷

「あれはいかに。よき大將とこそ見まあらせ候へ。敵に
後を見せたまふな。返させたまへ、返させたまへ。」



と扇あふせをあげてさし招く。

招かれて取つて返し、みぎはに打ちあがらんとするところに、熊谷波打際にてむずと組んで、馬よりどうと落ち、取つて押さへて首を取らんと、かぶとをあふのけて見れば、わが子小次郎が年ごろにて十六七ばかり、花のごとき少年なり。熊谷。

「そもそも、いかなる人にておはすらん。名のらせたまへ。助けまゐらせん。」

と申せば、

「まづかういふ汝はたぞ。」

「ものの數には候はね

ど、武藏の國の住人、

熊谷の次郎直實、

と名のる。

「さては汝のためにはよ

き相手ぞ。名のらずとも首を

取つて人に問へ。見知りたる者もあるべし。」

といふ。熊谷



「あつぱれ、大將かな。この人一人助け奉りたりとも、勝つべき軍に負くることあらじ。助けまゐらせん。」

とて、後をかへりみければ、土肥梶原五十騎ばかり出て來たり。

熊谷はらはらと涙を流して、

「あれ、ごらん候へ。いかにもして助けまゐらせんと思へども、みかたの軍兵満ち満ちて、よものがし候はじ。同じくは直實が手にかけ奉つて、のちのとぶらひをも仕らんと申せば、

「ただ、いかやうにも。とくとく首を取れ。」

とぞいひける。

熊谷あまりにいとほしく思ひけれど、さてもあるべきこととならねば、泣く泣く首を打ちにけり。首を包まんとて、ひたたれを解きて見れば、錦の袋に入れたる笛を腰に指しあたり。

「あないとほし。このあかつき、城の内にて管絃くわんげんしたまひつるはこの人々にておはしけり。やさしかりける人々かな。」

とて、これを取つて大將義經の見參に入れたれば、見る人涙を流しけり。

のちに聞けば、平の經盛つねもりの子、敦盛とて、生年十七にぞなりにける。

能登守教經のどのかみのりつね

さるほどに、源平のつはもの、壇だんの浦うらにて攻め戦ふ。

能登守教經は、今日を最期とや思ひけん、赤地の錦のひたたれに、唐綾からあやをどしの甲着て、鉞形打つたるかぶどの緒ををしめ、いか物作りの太刀をはき、重籐しげとうの弓持つて、敵を散々に射れば、源氏のものども多く手を負ひ、射殺さる。矢も皆盡きければ、大太刀、大長刀おほなきたを左右に持つて、散々になぎ倒す。

新中納言知盛しんちゆうなごんともりこれを見て、教經のもとに使者を立て、

「いたく罪作りたまふな。それらはよき敵かは。」

といへば、教經

「さては、大將に組めとや。」

とて、敵の船を飛んでまはる。されども義經を見知らざれば、甲かぶどのよき武者を、義經かと目をかけてかけまはる。義經、目にたつさまはしたれども、かれこれ行きちがへて、教經に組ませず。されども、いかにしたりけん、義經の船に乗り當り、あはやとばかり飛んでかかれれば、義經、長刀をわきにかいはさみ、みかたの船の二丈ばかり離れたるに、ゆらりと飛び移る。

教經、早わざにはおとりけん、續いても飛び得ず。今はかうと思ひ定め、太刀長刀も海へ投げ、かぶとも脱いで海へ捨てたり。甲の袖、草ずりもかなぐり捨て、胴ばかり着て、大手をひろげて船の屋形に立ち出で、大音聲あげて、

「源氏の方にわれと思はん者あらば、教經組んで生け捕りにせよ。寄れや、寄れ。」

といひけれども、寄る者一人もなかりけり。

ここに土佐の國の住人、安藝の太郎實光とて、およそ二三十人が力ある大力の者、おのれにおとらぬ家來一人ともなひたり。弟の次郎も、すぐれたるつはものなり。かれら三人

人寄り合ひて、

「能登殿、いかに強くおはすとも、何ほどのことかあるべき。たとへ鬼神なりとも、われら三人がつかみかからば、なか勝たざるべき。」

とて、小舟に乗り、教經の船に並べて乗り移り、太刀先そろへて一時に打つてかかる。

教經、これを見て、まづ真先に進みたる安藝の太郎が家來を、どうとけて海へ落す。續いてかかる安藝の太郎を、左のわきにさしはさみ、弟の次郎を、右のわきにつけてはさみ、一しめしめて、

「いざ、おのれら、死出の旅の供せよ。」
として、生年二十六にて、海へつつとぞ入りにける。

十五 漢字の音と訓

私たちは、毎日、本や、新聞や、雑誌ざっしを讀んでゐます。時には綴り方や、手紙を書きます。かうして讀んだり書いたりする文章は、漢字とかなで書き表されます。

かなは、だいたいきまつた音で讀みますが、漢字にはいろいろな讀み方があります。例へば、「國民學校」の「國」「民」といふ漢字は、「こく」「みん」と讀むほかに、「くに」「たみ」とも讀みます。「こく」「みん」といふ讀み方は、漢字本來の發音で、これを漢字の音といひます。「くに」「たみ」は、漢字の訓と呼ばれるものですが、これこそわが國の昔からのことばで、それを漢字に當てて讀んだものです。

「國」「民」「年」「島」など、そのほか大部分の漢字は一つの音で讀みますが、「木刀」「木目」の「木」は、「ぼく」とも、「もく」とも讀みます。また「銀行」「行列」の「行」は、「かう」「ぎやう」などと讀み、「宮城」「神宮」「宮内省」の「宮」は、「きゆう」「くう」「くなど」いろいろの音で讀みます。これはもともと支那各地で、いろいろの音が行はれてゐたのが、自然わが國へもはいつて、それぞれの讀みならば

しとなつたのです。

「國」「民」「靴」「杖」などの訓は、一つですが、「生まれる」「生える」「生きる」「生のやうに」「生をうまれる」「はえる」「いきる」「なる」と、いろいろに讀みます。これは、「うまれる」「はえる」「いきる」「なる」といつたわが國のことばを、漢字の「生」に當てて讀んだもので、それらの讀み方が、自然「生」の字の訓となつたのです。このやうに、訓にも、音のやうに二つ以上ある場合があります。音と訓を持つた漢字を、二字以上組み合はせて、ことばが書き表された場合には、どの漢字もすべて音で讀むか、または訓で讀むのが普通です。「先生」「遠足」「飛行機」「高射砲」などは、音ばかりで讀む例で、「神様」「笑顔」「物干竿」などは、訓ばかりで讀む場合です。

ところで、「山川」「父母」のやうに、「さんせん」「ふぼ」あるひは「やまかほ」「ちちはは」と、音でも訓でも讀める場合があります。また、ことばによつては、「重箱」「記念日」のやうに、上を音、下を訓で讀んだり、「手本」「道順」のやうに、上を訓、下を音で讀んだりする場合もまれにはあります。

漢字には、このやうに音と訓があり、中には、音訓にいろいろ種類があつて、意味の違ひや、文のおもしろみを出してゐるのです。漢字を音で讀むか、訓で讀むか、どの音で讀む、ど

の訓で讀むかはすべて、讀みならはしによつてきまるので
す。殊に、人の姓名や、地名などには、おのおの特別な讀み方
があります。

私たちが漢字を讀む時には、このやうにいろいろな漢字
の音と訓とに注意して、その場合に應じた、正しい讀み方を
するやうにしなければなりません。

十六 塗り物の話

「工場を見せていただきたいのですが。」

「さあ、どうぞこちらへおいでください。」

主人に案内された塗り物の工場は、薄暗い土藏の中である。
障子をもれて来る窓際の明かりで、職人が白木の盆ぼんのどこ
ろどころへ、黒い、やはらかな膏藥かうやくのやうなものを、細い竹べ
らでつめてゐる。

「何をつめてゐるのですか。」

「ごくそといふものですよ。米の粉と、おがくづとを、漆うるしで
ねり合はせたもので、木地に、すき間や、きずをなくすため
に、かうしてつめてゐるのです。」

左手で、盆をぐるぐるまはしながら、熟練した手早さで、職人
は、一つ一つのすき間へ、ごくそをつめて行く。

次の部屋へはいると、こくそをつめた白木の盆が、うづ高く積んである。そのかげで、職人の手が動いてゐる。その手は、盆を一枚一枚はけてさび色に塗つて行く。

「これはさび漆といふものです。さび土と漆と、まぜ合はせて作つたものです。さび土はその土地特有のもので、これがなかなか塗り物には大切なものです。」

職人は話しながらも、仕事の手はちつともゆるめない。

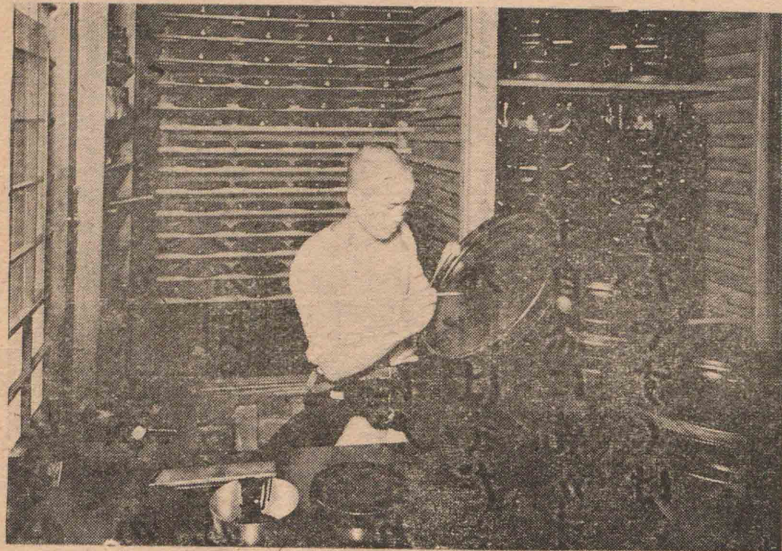
急な階段をのぼつて二階へ行くと、そこにもだまつて塗り物を塗つてゐる人たちがゐた。

この人たちは、下塗りののできた盆の内側へ、黒い漆を塗つて行く。さうして、時々くじやくの羽で穂先を作つた細かい

筆で、漆にまじつたごみを取つてゐる。

「下塗りは下の部屋でしますが、中塗りと上塗りは、二階の方がいいのです。塗り物にはほこりが禁物ですから。」

主人の話は、中塗りのことになる。「下塗りができあがると、その上へ、このやうに中塗りをします。」



盆のやうに簡単なものでも、表と裏と同時に塗ることはできません。まづ、このやうに内側を塗つて、それを乾かしてから外側を塗るのです。なかなか手数のかかる仕事です。」

さういへば、そばに積まれた中塗りの盆は、内側ばかりが塗つてあつて、外側はまださび色のままである。

「このまま自然に乾かすのですか。」

「いや、さうたやすくはいきません。この室むろの中をござんなさい。」

といひながら、主人は戸を開いた。上下二段にわかれた戸

だなで、中にはわくが仕掛けてある。

「このわくへ、塗つた物をはさみます。わくは心棒で支へ、時計仕掛で静かに回轉させながら、漆がまんべんなく行き渡るやうにして乾かします。この時計仕掛が發明されないう前は、夜中でも起きて、心棒を手でまはさなければならなかつたのです。」

なるほど、室の横側には、重い分銅ぶんどうのついた仕掛があつて、時計が時を刻むのと同じやうに、目に見えないくらゐゆつくりした動きで、わくが回轉してゐる。

「漆はよく天氣を知つてゐて、雨が晴かは、その乾き具合で

すぐわかるほどです。漆が乾く時には水分を吸収しますが、乾いてしまつたら水分を受けつけません。乾かさうと思へば、半日ぐらゐでも乾きますが、早く乾かし過ぎると、あとでちぢんでしわができたり、干割れがしたりします。だから、夏でも冬でもできる。だけ温度と湿度しつどに變りのない土藏が選ばれ、更に、室の中で乾かす必要があるのです。」

主人の話に感心しながら、上塗りの部屋へはいる。

下塗りと中塗りができた上へ、上漆をかけて最後の仕上げをする仕方は、中塗りと同様どうやうで、ここでも同じやうな工程がくり返されてゐる。

「これで、一通り工場の御案内は終りました。これから、製品陳列室ちんれつで、できあがつた品物を見ていただきたいと思ひます。」

さて、みなさん。私は陳列室へはいつて、いろいろな塗り物の並んでゐるのを見ましたが、みなさんの周圍には、どんな塗り物があるか氣をつけてごらん下さい。さうして、それらが一つ一つ、このやうにしてできあがつたのだといふことを、よく考へてください。

十七 ばらの芽

正岡子規

くれなゐの二尺のびたるばらの芽の針やはらかに春雨
の降る

松の葉の葉ごとにむすぶ白露のおきてはこぼれこぼれ
てはおく

島木赤彦

雪降れば山よりくだる小鳥多し障子のそとにひねもす
聞ゆ

若山牧水

土ぼこりうづまき立つや十あまり荷馬車すぎ行く夏草
の野路に

伊藤左千夫

汽車の来る重き力の地ひびきに家鳴りとよもす秋の晝
すぎ

おとろへし蠅の一つが力なく障子にはひて日はしづか
なり

國こぞり心ひとつとふるひ立ついくさの前に火も水も
なし

十八 敵前上陸



わが輸送船團は、マライ半島のクタバ
 ルをめざして進んで行つた。
 折悪しく月明かりだつたので、海岸を
 防備する敵軍はいち早くわが船團の近
 づくのを感じした。上陸開始後、まもな
 く海岸一帯の敵陣から、雨のやうな猛射
 を浴びせて来る。

爆弾をかかへた敵の飛行機は、輸送船團の頭上から襲ひ

かかつた。轟然、天地をゆるするやうな音響とともに、黒煙は
 天に立ちのぼつた。わが輸送船の一隻が、敵弾のため火を
 發したのであつた。

兵士は、銃を持つたまま、みんな水中へをどり込んだ。敵
 の戦闘機の群が、海面すれすれに、悪魔のやうな翼をひるが
 へして、掃射する。護衛の驅逐艦からも、輸送船からも、波間
 に浮かぶ舟艇からも、兵士が齒を食ひしはつて應戦する。
 一機また一機、黒い翼がぱつと紅の火焰を吐いて、まつさか
 さまに海中へ突つ込んで行く。

海岸からの敵の銃砲火は、ますます烈しさを加へて來た。

泳いでゐる兵士の鐵かぶどが、沈むかと思ふとまた浮かぶ。さうして、口から鼻から、白い水を吐き出す。輸送船からは、船員たちが、銃をはなせと聲をかぎりに叫び続ける。しかし海岸へ泳ぎ着いた兵士で、だれ一人銃をはなした者はなかつた。

海岸へたどり着くと、目の前に屋根形に張られた鐵條網が、行く手をさへぎつてゐる。その後には、とげのある鐵線が張りめぐらされ、更にその後には、屋根型の鐵條網が、嚴重に設けられてゐる。そこから五十メートルほど後の方には、帶のやうな塹壕ざんがうと、椰子やしの木かげに見えがくれする灰色のトーチカが築かれてゐて、あらしのやうに撃ちまくつて来る。

ぬれねずみの姿で海岸へはひあがつた兵士の身を、かくす物は何一つない。彈丸の夕立の中で、波打際に突つ伏したまま、兵士は身動きもしない。かれらは、両手をそろへて海岸の砂をほつた。そのくぼみに頭をかくし、肩をかくし、全身を埋めた。砂の上には、銃劍だけが残つてゐる。兵士は、もぐらのやうに全身を砂に埋めて、十センチ、二十センチと進んで行く。ぎらぎらと太陽の光を反射させながら、鐵かぶどが銃劍を引きずつて動いて行く。砂の上をひとり

でにすべつて行く、ふしぎな銃劔である。

鐵條網が、手のとどくところにせまつた。突然、網を切るはさみを持つてゐる兵士が一人、むつくりと起きあがつて、敵陣地へ突進する。そのとたん、天地にとどろくやうな爆音といつしよに、砂煙があたりをおほひ包んだ。

「地雷だ、氣をつける。」

部隊長のするどい叫びが傳はつた。その聲の終らないうちに、またしても、續けざまに二つの轟音がとどろいた。ものすごい砂つぶてが、うつ伏した兵士たちの全身をなぐりつけた。

「その場を動くな。」

部隊長の太い聲だ。

兵士は、はさみを手に手に持つて、次々に鐵條網へいどみかかつた。この瞬間しゆんかんであつた。一つ、二つ、三つと、鐵條網の向かふ側に、砂を盛りあげながら、もぐらのやうに進む皇軍の鐵かぶどの列が見られた。兵士たちは、鐵條網の下をほつてもぐつて、くぐり抜けたのだ。兵士たちは、砂の底で、砂といつしよに堅く銃身をにぎりしめた。

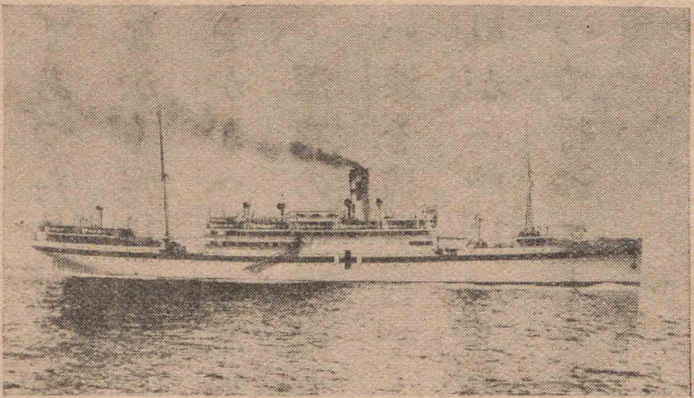
「ダーン」と音をたてて、敵の砲彈が兵士の目の前で炸裂し、あたり一面に、砂ぼこりがたちこめた。兵士は、「わあつ」と

きの聲をあげ、砂をけ立てて、いつせいに立ちあがつた。
突撃だ。第一線の鐵條網を破つてからは、どげのある鐵
條網も、屋根型の鐵條網も、まるで枯れ木のやうにもろかつ
た。砂にまみれ、血にまみれて突き進む皇軍將士の前には
塹壕も、トーチカも、敵兵も、何もなかつた。

十九 病院船

星の夜

病室の患者は、よく寝静まつてゐます。だまつて椅子いすに
腰をおろしてゐると、機關の響きと震動が、からだに傳はつ
て來ます。



少し氣分が悪いので、水で顔を洗つて
から、病室の中をまはりました。毛布を
脱いでゐる人に、そつと掛けてあげる。
いびきをたててゐる人、齒ぎしりをして
ゐる人、さうした人々の目をさますまい
と、氣をつけて靜かに歩いてゐるので
すが、そばへ行くとはつちり目をあける人
があつて、時々はつとします。

熱の高い患者の氷が解けてゐるので、冷蔵庫から氷を持

つて来て、みかんの小箱の中へくだきました。三本足の錐きりであつたのが、二本は折れて一本足になつてゐるので、なかなかだけません。患者が目をさましさうなので、私は箱をかかへて甲板かんばんへ出ました。

深夜の空には、ちりばめたやうに星がかがやいて、船は黒い漆うるしを流したやうな海原をけつて進んでゐます。強い潮風が一時に吹きつけて来て、氣分の悪いのも、眠いのも、さらつて行つてしまひました。

おかあさん

船はかなりひどく揺れだしました。今まで、船よひに苦

しんだことのなかつた私は、船の勤めは話に聞くほど苦し
いものでないと思つてゐましたが、今度は、いよいよやつて
来たやうです。でも、これくらゐの波に負けるものかと、と
もすればころがりさうになるからだを、はめ板や、手すりに
つかまつて支へながら、働きました。患者は半數ぐらゐよ
つて、ところどころに置いてある吸ひがら入れに、吐く音が
聞えます。機関の響きのほかに、船腹に當る波の音がもの
すごく聞え、船内は何だかさうさうしく、落ち着かなくなつ
て來ました。よつてはならないと、絶えず思ひ續けて胸を
なでおろしてみないと、つひ患者といつしよになつて、吐い

てしまひさうです。

夕方になると、海はますますしけて来て、波や風の音が、悪魔の叫びのやうに、氣味悪くなつて來ました。重い患者には、船の動揺が禁物です。收容する時には、さほどとも思はなかつた一人の患者が、船が揺れだしてから急に悪くなつて、全身に冷汗が流れ、目のまはりに黒いかげができて、目の光もにぶくなつてしまひました。私は、注射をして脈に注意してゐましたが、やがて呼吸が不正になり、脈がかすかになつたので、軍醫殿に知らせました。

軍醫殿は、すぐ來られましたが、患者はもう口をきく力もありません。ふいてもふいても、全身から汗がにじみ出ます。おほひかぶさつて來る黒いかげでも、拂ひのけようとするやうにもがいてゐるのが、患者の何でもない身振りに、もうかがはれます。ひとしきり、重い静けさが續きました。が、やがて、

「おかあさん。」

と、かすかな叫びが聞かれました。満身の力をこめて、出したことばでありませう。それと同時に、全身の氣力は、なくなつてしまひました。

何萬の敵をもものともせず、戦ひぬいたこの勇士の頭に、最

後にひらめいたのが、二十何年いつくしみ育ててくれた、尊
い母の姿であつたのでせう。

あらし

宵番よひばんの人が起しに来た聲を聞いて、早く白衣に着かへて、
病室へ行かなければと思ひながら、どんなにもがいても、ど
うしたとか、からだがかききません。海は、ますます荒れて
あるやうです。よろめきながら、やうやくのびあがつて、衣
紋掛から白衣を取りはずすと、またへなへなど、寢床に、から
だがたたまつてしまひました。靴下は、横になつたまままで、
どうにかはきました。

「しつかりしろ。しつかりしろ。」

ど、だれかが耳もとでささやくやうですが、だれもあるの
はありません。とたんに、私の頭の中には、病室で苦しんで
ある患者の顔が浮かんで來ました。

「さうだ。これくらゐのことで——かぎりある身のかた
めさん。」

私のからだは、すつくと立ちあがつて、白衣を着てみました。
内地に着きさへすれば、完全な治療をする病院が、この勇
士の患者たちを待つてゐる。それまでの間、どうとでもし
て看護の手を盡くし、無事に送り届けてあげなければ——

かう思つた私はもう船の動搖にもよろめかない足取りで、病室へ向かつてみました。

二十 ひとさしの舞

一

高松の城主清水宗治しみづむねはるは急いで天守閣へのぼつた。

見渡すと、廣い城下町のたんぼへ、濁流だくりうがものすごい勢で流れ込んで来る。

「どうとう、水攻めにするつもりだな。」

この水ならば、平地に築かれた高松城が水びたしになるのも、間はあるまい。押し寄せて来る波を見ながら、宗治は、主家毛利輝元てるもとを案じた。この城が落ちれば、羽柴秀吉はしばひてよしの軍は、直ちに毛利方を攻めるに違ひない。

主家を守るべき七城のうち、六城がすでに落ちてしまつた。今、せめてこの城だけでも、持ちこたへなければならぬと思つた。

宗治は、城下にたてこもつてゐる五千の生命をも考へた。自分と生死を共にするといつてゐるとはいへ、この水で見殺しにすることはできない。中には、女も子どももある。このままじつとしてはゐられないと思つた。

軍勢にはちつとも驚かない宗治も、この水勢にははたと困つてしまつた。

二

さきに、羽柴秀吉と軍を交へるにあたり、輝元のをぢ小早川隆景は、七城の城主を集めて、

「この際、秀吉にくみして身を立てようと思ふ者があつたら、すぐに行くがよい。どうだ。」

とたづねたことがあつた。その時、七人の城主は、いづれも「これは意外のおことは。私どもは一命をささげて國境を守る決心でございます。」

と誓つた。隆景は喜んで、それぞれ刀を與へた。宗治は

「この刀は、國境の固め。かなはぬ時は、城を枕に討死せよ」といふお心と思ひます。」

ときつぱりといつた。

更に秀吉から、備中備後の二箇國を與へるから、みかたになつてくれないかとすすめられた時、宗治が

「だれが二君に仕へるものか。」

と、しかりつけるやうにいつたこともあつた。

かうした宗治の態度に、秀吉はいよいよ怒つて、軍勢をさし向けたのであるが、智勇すぐれた城主、これに従ふ五千の

將士たやすくは落ちるはずがなかつた。

すると秀吉に、高松城水攻めの計を申し出た者があつたので、秀吉はさつそくこれを用ひみづから堤防工事の指圖をした。夜を日に繼いでの仕事に、さしもの大堤防も、日ならずしてできあがつた。

折から降り續く梅雨のために、城近く流れてゐる足守川は、長良川の水を集めてあふれるばかりであつた。それを一氣に流し込んだのであるから、城の周圍のたんぼは、たちまち湖のやうになつた。

三

毛利方は高松城の危いことを知り、二萬の援軍を送つてよこした。兩軍は、足守川をさしはさんで對陣した。

その間にも、水かさはずんずん増して、城の石垣はすでに水に没した。援軍から使者が来て、

「一時、秀吉の軍に降り、時機を待て。」

といふことであつたが、そんなことに應じるやうな宗治ではない。宗治は、あくまでも戦ひぬく決心であつた。

そこへ、織田信長が三萬五千の大軍を引きつけて、攻めて来るといふ知らせがあつた。輝元はこれを聞き、和睦をして宗治らを救はうと思つた。安國寺の僧惠瓊を招き、秀吉

方にその意を傳へた。和睦の條件として、毛利方の領地、備中備後、美作、因幡、伯耆の五箇國をゆづらうと申し出た。

秀吉は承知しなかつた。すると意外にも、信長は本能寺の變にあつた。これにはさすがの秀吉も驚いた。さうして、惠瓊に、

「もし今日中に和睦するなら、城兵の命は、宗治の首に代へて助けよう。」

といつた。

宗治はこれを聞いて、

「自分一人が承知すれば、主家は安全、五千の命は助る。」

と思つた。

「よろしい。明日、私の首を進ぜよう。」

と宗治は答へた。

四

宗治には、向井治嘉といふ老臣があつた。その日の夕方、使者を以つて、

「申しあげたいことがあります。恐れ入りますが、ぜひおいでを。」

といつて來た。宗治がたづねて行くと、治嘉は喜んで迎へながら、かういつた。

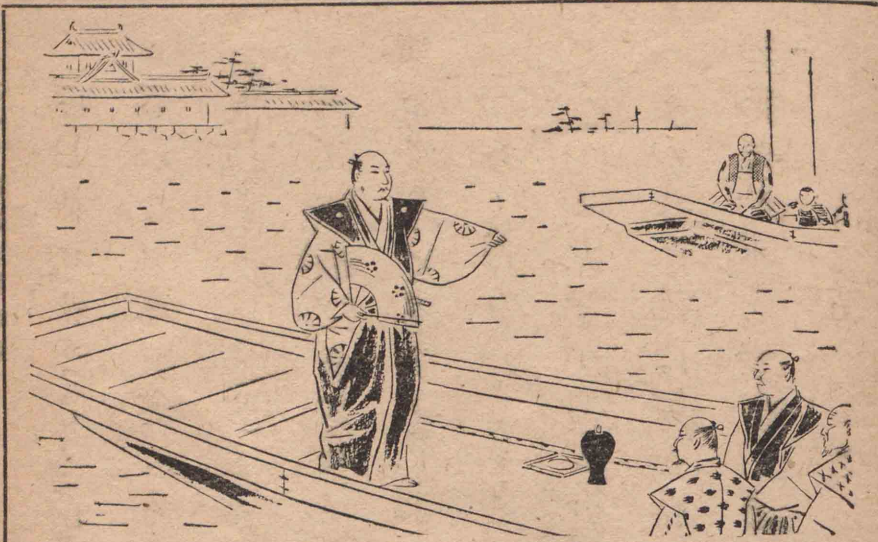
「明日御切腹なさる由、定めて秀吉方から檢使が參るでございませう。どうぞりつぱに最期をおかざりください。私はお先に切腹をいたしました。決してむづかしいものではございません。」

腹巻を取ると、治嘉の腹は、眞一文字にかき切られてゐた。

「かたじけない。おまへには決して犬死をさせないぞ。」
といつて、涙ながらに介錯かいしやくをしてやつた。

その夜、宗治は髪を結び直した。靜かに筆を取つて、城中のあと始末を一々書き記した。

五



いつのまにか、夜は明けはなれて
あつた。

身を清め姿を正した宗治は、巳みの刻を期して、城をあとに、秀吉の本陣へ向かつて舟をこぎ出した。五人の部下がこれに従つた。向かふからも、檢使の舟がやつて来た。

二さうの舟は、靜かに近づいて、満満とたたへた水の上に、舷かたはたを並べた。

「お役目ごくろうでした。」

「時をたがへずおいでになり、御殊勝に存じます。」

宗治と検使とは、ことばずくなに挨拶を取りかはした。

「長い籠城に、さぞお氣づかれのこととせう。せめてもの
お慰みと思ひまして。」

といつて、検使は、酒さかなを宗治に供へた。

「これは、これは、思ひがけないお志。ゑんりよなく、ただ
きませう。」

主従六人、心おきなく酒もりをした。やがて宗治は、

「この世のなごりに、ひとさし舞ひませう。」

といひながら、立ちあがつた。さうして、おもむろに誓願寺
の曲舞を歌つて、舞ひ始めた。五人も、これに和した。美し
くも、嚴かな舞ひ納めであつた。

舞が終ると、

浮世をば、今こそわたれもののふの名を高松の苔こけにのこ
して

と辭世の歌を残して、みごとに切腹をした。五人の者も、皆
そのあとを追つた。

検使は、宗治の首を持ち歸つた。秀吉は、それを上座にす
ゑて、「あつぱれ武士の手本」といつてほめそやした。

看	乾	墓	較	緯	系	菜	象	救	儉
(141)	(122)	(96)	(80)	(62)	(55)	(50)	(40)	(22)	(7)
届	收	希	努	銳	宗	箸	陰	沒	硯
(141)	(124)	(96)	(81)	(64)	(56)	(50)	(41)	(23)	(7)
交	程	椿	簡	掃	靈	健	慰	非	筆
(144)	(124)	(98)	(81)	(66)	(56)	(50)	(42)	(25)	(7)
境	猛	漢	旨	衰	榮	康	想	速	鉛
(144)	(128)	(114)	(85)	(69)	(56)	(50)	(42)	(25)	(7)
智	驅	省	判	避	基	態	像	紫	異
(145)	(129)	(115)	(85)	(70)	(58)	(52)	(42)	(29)	(7)
湖	逐	普	譽	歡	減	臨	墨	紅	啓
(146)	(129)	(116)	(85)	(70)	(58)	(53)	(43)	(29)	(9)
件	艇	姓	聖	吉	輸	認	研	織	尉
(148)	(129)	(118)	(85)	(73)	(60)	(53)	(44)	(33)	(10)
檢	埋	塗	舉	縫	示	敢	究	緣	致
(150)	(131)	(118)	(86)	(75)	(61)	(54)	(44)	(35)	(12)
髮	庫	藏	閣	覽	好	襲	費	測	察
(150)	(135)	(119)	(89)	(76)	(61)	(54)	(44)	(35)	(13)
辭	搖	熟	期	因	容	宣	周	視	郊
(153)	(136)	(119)	(92)	(78)	(61)	(55)	(46)	(36)	(16)
	醫	禁	悔	翌	易	詔	陶	眼	僚
	(138)	(121)	(93)	(79)	(61)	(55)	(47)	(36)	(17)
	療	單	存	比	編	言	巧	殊	幼
	(141)	(122)	(94)	(80)	(62)	(55)	(47)	(37)	(19)

附録

一 土とともに

ひでり

今年は、ひでりだ。張は、うらめしさうに天を仰いだ。もう、何度雨ごひをしたか知れない。けれども、雨雲一つ浮かんでは來なかつた。

「この村に、きつと不信心者がゐるんだ。」

「だれだ。」

「だれだ。」

一 土とともに

農夫たちは、口々にそんなことをいつた。

畠の主が、ほこほこに乾ききつてゐる。黄色な土が、すっかり白
つぽくなつた。せと物のやうに固くなり、ひびがはいつた。

花をつけようとした麥が、そのまま枯れて、見えるかぎりの麥畠
は、しらがになつた。

たべる物が、だんだんなくなつて来る。大事にしまつておいた
倉の物も、あと、いくらもなくなくなつてしまつた。

「張さん、何か恵んでください。うちの子どもが、うゑてるます。」
張は、自分の二人の息子のことを思ひ、倉には、ほとんど物のない

ことも思つた。それでも、張は、倉から麥粉を出して来た。
「ありがたうございます。これで、子どもたちは、生き延びませう。」

井戸の水も、かれて来る。

「おとうさん、どこかへ行きませう。」

二人の子どもは、かういつてせがんだ。
けれども、張はだまつてゐた。

「おとうさん、御飯のあるところへ行き
ませう。」

「おかあさんも、いつしよに行きませう
ね。」

張は、突然大きな聲でどなつた。

「どこへ行かうといふのだ。干ばしに
なつても、ここを離れることはできな
い。」



大水

ある年は、雨續きであつた。来る日も、来る日も、ざんざん降つた。「これでは大水だな。」

張は、遠くを流れてゐる川の音に、耳をすました。

一たび、この川があふれたが最後、こころあたりは、海のやうになつてしまふ。島はもちろんのこと、家でも、土堀でも、樹木でも、廟でも、みんな水びたしになつて、くづれてしまふのだ。

「水には、かなはない。立ちのかう。」

張は、夜具をかつぎ、手に麥粉と塩をさげ、妻は、なべや、やくわんや、布ぎれなどを持つた。二人の子どもは、茶わんや、紙や、油や、マツチを持つた。

「もう、こんなところには来ないね。おとうさん。」

「おとうさん、わたしも、こんなところはイヤだよ。」

「何をいつてゐる。水さへ引けば、すぐここへもどつて来るのだ。」水を逃げて行く農夫の群が、あちらにも、こちらにも、雨に打たれて動いてゐた。

いなご

「おお、今年こそは豊年だ。」

張は、よく實のりかけた麥島を見渡しながら、「何年ぶりかで、倉がいつぱいになるな。」と思つた。

張は、子どもたちと約束した物を、ふと思ひ出した。たこがあつた。笛があつた。なつめの砂糖づけもあつた。

こんなことを思ひながら、地平線を見た。すると、にはかに黒い雲がわいて来た。それが、みるみる近づいて来る。

雲ではなかつた。

「いなごだ、いなごの大群だ。」

「おうい、おうい。いなごだぞう。」

「いなごだぞう。」

農夫たちは、はうきを持つたり、たいまつを持つたりしたまま、うはのそらで、天を見てるばかりである。

いなごの群は、雨のやうに、ざあつと畠に降つた。作物は、ひとたまりもなく、むざんに食ひ荒されてしまつた。

明月

五風十雨、今年は何とありがたい年であつたらう。粟も、大豆も、かうりやんも、これ以上實のねないといふほど、ゆたかにみのつた。今日は夜明けから、張の家では、麥刈をやつてるた。いくら汗が

流れても、楽しい汗であつた。いくら、腰や腕がつかれても、こころよいつかれであつた。

「これで、もう大丈夫。こんどこそ安心。」

長い麥のうねを刈りあげるたびに、こんなひとりごとをいつた。子どもたちとの約束が、果せると思つただけでも、張はうれしくてならなかつた。

仲秋明月の夕暮である。

畠から大きな月が出て来た。

庭へ出した机の上に、梨やぶどうを供へた。



紅べにをつけたお菓子もかざつた。らふそくには、火がともつた。風の無い静かな月の出である。二人の子どもは、笛を合はせて吹いてゐる。張は、しみじみと幸福にひたつた。

二 愛路少年隊

交通路かうつうろは、ちやうど、人間でいへば血管けっかんのやうなものである。もし、血管に少しでもさしさはりがあれば、からだの働きも望めないやうに、交通路に故障が起れば、國の活動は、たちまちとどこほることになる。殊に支那のやうに、廣くて大きな國では、交通路が何よりも大切である。

交通路には、鐵道があり、自動車道路があり、水路があつて、北支那



だけでも、これらの延長は、約二萬六千キロにもなるといはれる。更に、中支那、南支那のものものを合はせたら、實におびただしい數字にのぼるであらう。

この長い長い交通路を、りつぱに整へ、安全に保つことができないうちは、支那の活動も、發達も望めない。北支那に愛路村あいじょ村といふ地域ちゆうぎが設けられたわけも、ここにある。

愛路村といふのは、交通路を愛し、これを守る村のことで、道の兩側のおの十キロ以内のところを、これに當ててゐる。愛路村に住んでゐる青年は、愛路青年隊を組織し、女子は婦女隊を組織し、少年たちは、愛路少年隊を組織してゐるのである。

愛路少年隊には、十一歳から十七歳までの少年がゐる、みんな元氣のよい顔に、國防色の制服を着て、櫛の棒をかつぎながら堂々として行進する。かうした訓練を受けたのち、少年たちは、それぞれの任務を帯びて、受持の場所につく。

あれほど廣い支那のことであるから、今でも日本の眞意がわからないで、いつ心得違ひのらんばう者が、現れないともかぎらないからである。

愛路少年隊には、次のやうな美談がある。

ある少年が、鐵道のこはれてゐるのを見つけた。急いで本隊に報告しようと思つて走つて行くと、向かふから列車が進んで來る。このままにしておけば、列車は、ひつくりかへるばかりだ。少年は、線路の上に二王立ちになり、持ち合はせてゐた布を振つて、やつと

列車を少年の寸前で止めた。

ある少年は、自動車道路の見張りを受け持つてゐたが、急病で寝込んでしまつた。といつて、その任務は、しばらくも捨てておくことができない。

そこで、少年の老父が、これに代つて見張りに出かけた。折悪しくあらしになつて來た。

がけを曲らうとした時、烈しい風が吹いて來て、父親を深い谷あひに落してしまつた。かうして、父親は、少年の身代りとなつた。

楊やなぎといふ少年がゐる。ある夜、これも鐵道線路がこはされてゐるのを發見し、地だんだふんでくやしがつた。かれは、すぐその悪者がどこから來たか、どこへ逃げて行つたか、何名來たか、それらを調べ始めた。悪者といつても、村の良民と違つた着物を着てゐる

わけでもなければ、ことばが變つてゐるわけでもない。これをさがし出すのは、非常に困難であり、みんなは、何の手がかりもないこの調査を、打ち切らうといひ出した。楊少年は、「自分の村に起つたことだ。どうしてもさがし出さなければならぬ。」といつて、止めなかつた。

ある日の夕方、かれは村の墓地を通つてゐた。すると、そこにかくれてゐたあやしい者が、三人現れた。楊少年は、てつきりこれだと思つた。急いで報告しようと思ひ、いつさんに走り出した。すると、三人もあとを追ひかけた。追ひつけないと思つた一人が、いきなり手投げ爆弾を投げつけた。爆弾は、大きな音をたてて破裂し、その破片が、楊少年の肩や背にあたつた。少年は、氣を失つた。悪者たちは、そのままどこかへ姿をかくしてしまつた。

この物音に驚いて、村の人たちがかけつけてみると、楊少年が倒れてゐる。さつそく病院へかつぎ込んで、みんなで介抱したが、その夜は、ただ眠り續けてゐるばかりであつた。あくる朝になつて、始めて目をさました。楊少年は、苦しい息の下から、

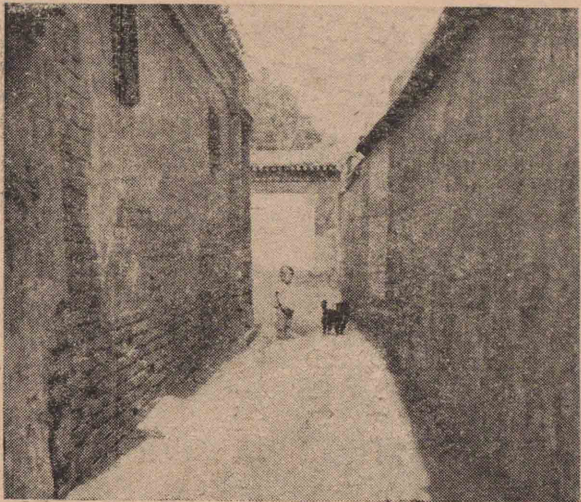
「悪者が三人、あの墓地に――」

と叫ぶやうにいつた。さうして、またすやすやと眠りだした。まもなく、楊少年は、また何かいはうとして口を動かしてゐる。耳を寄せて聞くと、

「ニッポン、バンザイ。」

といつてゐる。それつきり、少年の息は絶えてしまつた。

三 胡同風景



ながつてゐる感じである。

北京の町には、胡同が網の目のやうに通じてゐる。胡同といふのは、小路のことである。

どこの家も、高い土塼を立てめぐらしてゐるので、小路は、おのづから高い土塼續きになつてゐる。あまり道幅もない。兩側の土塼の上から、ゑんじゆの枝や、楊の木や、ねむの枝などが、ずつと延び出し

一見、何の曲もないやうなこの胡同ではあるが、ここに住んでゐる子どもたちにとつては、かけがへのない楽しい遊び場所であり、大きくなつてからのなつかしい思ひ出となる天地である。

冬は冬で、風當りの少ない胡同の廣場に、子どもたちがたむろして、日だまりを樂しみ、夏は夏で、ひんやりとした土塼の日かげを選んで、風の通り道で遊んでゐる。

遊ぶといつても、別におもちやや繪本などを持つて、遊ぶわけではない。その邊を走つたり、地べたに尻もちをついて、穴をほつたり、土で團子のやうなものをこしらへたり、遠くの方から響いて來るいろいろな物音に、耳を傾けたりしてゐるのである。

物音には、いろいろなものがある。まづ、物賣りが鳴らして來る鳴り物の音がおもしろい。

床屋が通る。客の腰掛ける朱塗りの椅子や洗面器や道具を入れた、これも朱塗りの箱を、てんびん棒でかついでやつて来る。片手には、大きな毛抜きのやうなものを持ち、片手には鐵棒をにぎつてゐて、時々、毛抜きを鐵棒で勢よくしごく。すると、「ビーン」とあとを引く、やうな響きがする。その「ビーン」がはたと止ると、そこでは、どこかの子どもが、もう頭をつるつるにそられてゐるのである。

糸屋が来る。荷車を引きながら、ゆつくり歩いて来る。でんでんだいこのやうな、ブリキのつづみを鳴らしてやつて来る。「チャカチャン、チャカチャン」と、軽やかな、はずむやうな音をたてる。すると、どこからともなく女の人たちが集つて来て、糸屋さんを取り巻く。黄色や、紅白の糸たばがくりひろげられて、しばらくは話がにぎやかに続く。

いかけ屋が来る。これも、いろいろな道具を入れた荷をかついでゐる。前の荷の上に、小さなどらをぶらさげておき、その兩側に分銅なごりをつるしておく。歩いて行くと荷が揺れて、自然に分銅がどらに當る。「ポーン」と、かはいらしい音をたてる。

どらにも大小さまさまがあつて、音色も違ふし、同じ大きさのどらでも、その打ち方によつて音が違ふ。「あの音は、おもちや屋さんだ。」「今のはあめ屋さんだ。」と、それぞれすぐわかる。

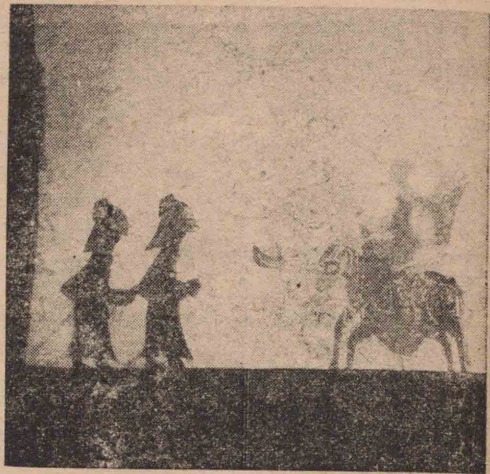
その中で、いちばんさわがしくて、大きな音をたてるのは、猿まはしのどらであらう。「ジャン、ジャン、



ジャン。」と、激しくたたいておいて、手のひらで、どらを急に押さへるので、「ジャン、ジャン、ジャッ。」といふやうに聞える。これを聞きつけて、子どもが大勢集る。まるで輪になつたその中で、猿がさまざまな藝をする。三國志とか、西遊記といった支那の昔物語をやるつもりなのだが、猿は途中で、きよとんとして止めてしまつたり、とんでもない別のことを演じたりする。それが、見てゐる人にはかへつておもしろく、笑ひ聲が絶えない。猿まはしは、猿を使つたり、せりふをいつたり、はやしを入れたりしなればならないので、なかなかいそがしい。



子どもの見ものでは、このほかに影繪がある。日暮れ時の胡同の廣場などに、影繪の舞臺をこしらへて、そこで人形をあやつ



る。ほのぼのとした影が揺れながら動くのは、子ども心を引きつけて止まない。思はず夜のふけるのも知らないで、見とれてしまふ。ふと気がついて、子どもたちは、あわてて家にもどつて行つたりする。鳴り物を使はないで、呼び聲でやつて来る者もある。

まんぢゆ屋がさうだ。朝早く大きな聲で叫びながら、ふれ歩いて来る。やつと目がさめたころ、遠いところを通るその聲を聞くのは、夢の中の聲のやうに思はれる。

春は、苗賣りがやつて来る。

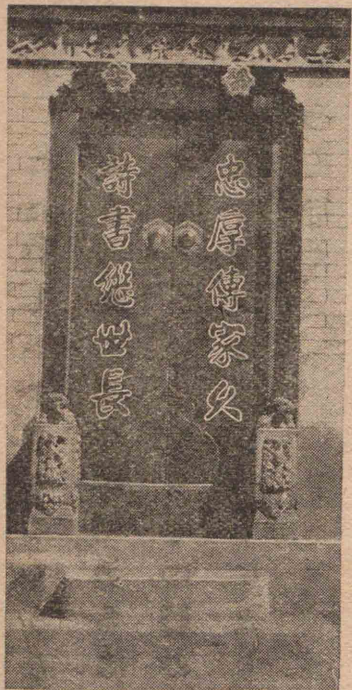
夏は、金魚賣りがやつて来る。「さあさあ、金魚をお買ひなさい。」

大きな金魚に、小さな金魚。」こんなことをいつて通る。
 アイスクリーム賣りがやつて来る。「おいしい、おいしいアイス
 クリーム。にほひも砂糖もおほまけだ。」と歌ふ。
 秋には、なつめ賣りもやつて来る。ぶだう賣りもやつて来る。
 たとへ鳴りものであらうと、呼び聲であらうと、管のやうな胡同
 には、それがふしぎなほどよく響き渡る。

このやうに、いろいろな物音が響くが、何といつてもいちばん耳
 に親しいものは、水を運ぶ一輪車の音であらう。水に不便な北京
 城内では、一軒一軒、水を運んで行かなければならない。大きな水
 槽をのせた一輪車が、「キリキリ、リリリ」ときしみながら、かん高い響
 きをたてる。だから、車の動いてゐる間、絶え間なく「キリキリ、リリ
 リ」が響く。夏の日には、この音が涼味をさそひ、冬の日はいかにも

さむざむとした氣持を起させる。

夜の胡同は眞暗なので、それこそ鼻をつままれてもわからない
 ほどである。それだけに、空が美しい。月が出てゐれば、出てゐた
 で美しく、星の夜であれば、また更に美しい。青みがかつた明かる
 い夜空に、南京玉のやうな星がばらまかれて、一つ一つが、かがやい
 てる。



胡同に面した家々の門には、聯が書かれてある。めでたい文句

であつたり、詩の一節であつた
 りするが、いづれもりつばな文
 字で書かれてある。小さな子
 どもは、繪も字もわからないこ
 ろから、この門柱の聯を眺めて

る。ただ美しいかざりのやうな氣持で眺めてゐる。それが、だんだん大きくなつて文字であることがわかり、その文字の意味がわかつて來ると、いつそその聯の美しさが心に刻まれて來る。隣りの家の聯がわかるやうになり、向かふの家の聯もわかるやうになつて行く。

正月には、門の戸びらに、眞赤な紙にめでたい文字を書いた春聯が張りつけられる。子どもたちは、その新鮮なかざりに正月氣分を味はふ。

春になると、鳩はと笛が天から響いて來て、胡同をにぎははせる。鳩笛といふのは、鳩に笛を結びつけて飛ばすのである。飛ぶと、風を受けてその笛が鳴る。笛には大小があるから、鳩が群になつて飛んで來ると、笛の音がいろいろに鳴つて、それこそ天上の音樂である。

中庭のあんすが咲いて、花びらが胡同へちらちらと降つて來るのも、このころである。

楊やなぎのわたが、どこからともなくたくさん舞つて來る。小さな光つたわたが、土塀の片すみにたまる。ふはふはとまるくなつて、風が吹いて來ると、ころころところがり出す。子どもたちは、それをつかまうとして追ひかける。

大通を、豚ぶたがぞろぞろと歩いて行く。その鳴き聲が胡同に響いて來る。

あひるが「があがあ」とさわいで行く。

花嫁行列のラッパの音が、どこかで響く。子どもたちは、またそちらの方へ走つて行く。

胡同は、子どもたちを育ててくれる母のふところのやうなもの

である。子どもたちは、この中で自然の美しさにひたり、人情の温かさを吸って、おほらかにのびて行く。

昭和十八年七月十日 印刷
昭和十八年七月十二日 發行
昭和十八年七月十三日 翻刻印刷
昭和十八年八月四日 翻刻發行

本卷挿入ノ寫眞ハ昭和十八年六月陸軍省海軍省ト協議済

著作權所有

著作兼
發行者

文

部

省

初等科國語六
定價金貳拾九錢わ

東京都王子區堀船町一丁目八百五十七番地

翻刻發行
兼印刷者

東京書籍株式會社

代表者 井上源之丞

印刷所

東京都王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社工場

昭和十八年七月十四日
文部省檢査濟



發行所

東京書籍株式會社

初五長尾祐子